
私とAクラスと召喚獣

Scarlet ZoomAir After The Fainal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とAクラスと召喚獣

【Zコード】

Z0103S

【作者名】

Scarlett ZoomAir After The Fail
nal

【あらすじ】

東方projectの要素とめだかボックスの要素が少し入った
らどうなるかなあ・・・とか思つて作つてみたww更新は不定期で
す！（キリッ 只今清涼祭編

こんなの咲夜じゃない！！ とか思つて思いますが許容してくれ
ると嬉しいです。名前が一緒の別人と考えて貰つても構いません！

…多分。

評価をしてくれると私は泣いて喜びます。

PV: 86, 278アクセス

ユニーク: 14, 572人 総合評価

299pt

有難う御座います

プロローグ

「あれ？ 知らない天井だ」

俺の名前は『剛田 オウタ 桜華』オウカ。渾名は『ジャイアン』。ドラえもんのジャイアンと同じ名字だからジャイアン。……なんだか泣けてくる。でも名前は女みたいとか言われるよりはまだマシだと思つ。……そうでもないか。

さて、田が覚めると知らない天井。自分が出したとは思えない全く別人の声。……うんー テンプレだな。

【おつ、田を覚ましたみたいだね。おはよつ。】

そんなことを思つてるといきなり聞こえるこの脳内に直接話しかけてくるような感じの声。あれ？ 何気に俺つて冷静だな。違うか。諦めの領域に入つてるからだな。兎に角話しを聞いておひづ。無心にいぐぜ！ 無心になあ！！

少し台本書き入ります。

桜「おはようございます。誰ですか？」

?【神ですがなにか（・・・・）キッシ】

桜「そうですか。で、これはどういう状況ですか？」

神【あ、別に口に出わなくとも話せますよ?】

桜【あ〜、もう〜で、どういう状況?】

神【はい。あなたを死なせてしまったので転生していただきました。】

桜【あ〜、やっぱりテンプレ的状況?】

神【はい。そこでやはり能力をあげよつかと思いまして。】

桜【了解了解。その前にこの世界について〜】

神【バカでテストと召喚獣の世界ですね。後、東方も混じつてます。】

桜【じゃあ、幻想を司る程度の能力で。ま、簡単に言えばなんでもできる能力だね。】

神【わかりました。……はい、できました。次に設定なんですが、あなたは幻想郷に住んでいて、レミリアとフランドルの姉で紅魔

館の主という設定です。明日から文月学園に入学になります。なにか困ったことがありますましたら私を呼んで下さい。】

桜【了解。なんて呼べばいい?】

神【では『神』^{シン}と。あ、あと名前もえておいて下さいね。それでは。】

桜【はーい。またね。】

台本書き終了です。

……。え?姉つて?俺つて性転換してるの!?しかもバカテスと東方つてww

しかも入学が明日つて急だしww

もひびひにでもなれ(、・・・)シヨン

兎に角考えないとな……色々と……。

私と個人情報と・・・（ネタバレ注意）

名前

桜華・S・T・天月

オウカ・スカーレット・ティレイ・アマツキ

O u k a S c a r l e t T h i r e i A m a t u k i
容姿

緋色の眼をして、金髪に青紫色のメッシュが入っている髪をポニーテイルにしている。髪が長く、ポニーテイルを外すと膝のあたりまであり、ポニー テイルをしている時もお尻の少し上のところになる。眼の下から頬にかけて赤い刺青がある。

性別

女性

種族

吸血鬼

能力

幻想を司る程度の能力

詳細

転生者。『東方project』の紅魔館の主。スカーレット姉妹が妹に当たる。『めだかボックス』の異常・過負担を能力を使ってすべて使えるようにしている。

また、異常と過負担はオンとオフの切り替えができるようにしているので幻想卿から出るとオフにしている。（幻想卿では常時オンにしている。）完全記憶能力を能力を使って所持しており、いつも高得点を取っている。表にはださないが極度のシスコンと言つていいく程に妹を溺愛している。

召喚獣

動物のモデルは白虎。眼から頬にかけて赤い刺青が入っている。防具は上がサラシで、下が黒で青いラインが入った長ズボン。出現方法は魔方陣が描かれるとその中心から七つの色にそれぞれ分かれ

た炎が現れ、魔法陣の周りを回る。そして、何回か回った後にまた中心に行き、大きな虹色の炎が出来上がる。その炎を縦に切り裂き出現。武器は一本の日本刀。

腕輪

『呪縛せし鬼と禁忌を犯せし道化師（サーージュムーン・クラウンビットテイショーン）』

- ・スペルカードを召喚獣が使うことができる
- ・自分が知っている幻想郷の能力を扱うことができる
- ・周りにいる仲間の点数を吸収して自身の召喚獣の点数として扱うことができる

十六夜 イザヨイ
咲夜 サクヤ

容姿

銀髪、青眼。常時メイド服。怒ると赤眼になる。

性別

女性

種族

人間

能力

時を操る程度の能力

詳細

原作の咲夜とほとんど一緒。だが、桜華のことになると別人のように性格が変わる。

召喚獣

動物のモデルは犬。武器は咲夜お気に入りの銀製ナイフ。防具はメイド服。出現方法は魔方陣が描かれた後、懐中時計が現れ、それが割れると片膝をついた咲夜が現れる。

腕輪

『^{ジャラルメント・ファンタジア}
時空幻想奇術』

- ・スペルカードを扱うことができる
- ・他人の召喚獣と合体することができる
- ・他人の召喚獣の動きを模倣できる

私と咲夜と幻想と・・・

はい、どうも。前回、いきなりすぎてまつたくついていけなかつた

剛田 桜華です。

とにかく名前を考えています。

「……兎に角、桜華は残そう。女の子になつたし、いきなり変えたら分からなくなるからな。」

そう、女の子になつたのだ。意味不明。解析不能。後で姿だけでも見とこり。うん、そうしよう。

でも、なんだか見た限りそれなりに胸は大きいぞ？うん。紅魔館組に恨まれそう。

まあ、今は名前だ。

桜華……なんだか格好いいのがいいな。…スカーレットはいれるだろ？……そういえば神か…神に転生させて貰つたんだつらちよつとぐらい名前貰つてもいいよな？いや、理屈は通つてないけどな？

神で思い付くのはやつぱりメジャーな天照大神と月詠とかだよな…一文字ずつ貰うか。天と月で天月だな。

これでハーフ風に桜華・S・天月だな。

え？なんでハーフ風のかつて？格好いいからだがなにか？（・・・）キリッ

でもなんだか足りないなあ……。適当につぶつとくかな……アルフ
アベット順にいくと丁だから丁にしよう。

「……ていー……ティロイター？誰だよ。……ティレインスター？
アレイスターみたいだな。まあ、深く考えるのも面倒くさいしティ
レイでいいだろ。

桜華・S・T・天月。

うん。格好いいじゃないか。合格だ。

後、俺から私にしどけなんとかなるだろ。じゃあ次に、自分がど
んな容姿をしてるかだな……ブスだつたらいやだな……。まあ、大
丈夫だとおもつナビ

わあ、ござーー！

「…………。え？誰？この可愛い子」

あっれー。これ本当に鏡？誰だよこのべっぴんさん。

身長は165㌢前後で胸は少なくともはある。髪の毛は金髪で
所々に青紫色が混ざっている。切れ長の眼は赤く、緋色が一番近い。
細長く整った眉毛。背中にはレミリアのような羽。それと腰のあたりにもフランのような羽がついている。服も紅と黒をベースにした
洋服で、所々にフリルがついていて可愛い。

もう一度言おう。誰？この可愛い子。

「と、兎に角俺への認識を当たり前に定着させるか。」

幻想を司る程度の能力で幻想郷全域に私への存在を紅魔館の主と認識させる。これで大丈夫なはずだ。

次に、自身の妖力を無限に、体力を無限に、自身を神祖化して……と。

咲夜を呼んでみてなんともなかつたら完了だな。あ～、でもどう呼ぼつかな……。叫んだら来るかな？

「わーくー やーーー！」

「お呼びでしょつかお嬢様。」

ふおおあちゃあ！？いきなり現れるとがビックリするわ～。『時間操る程度の能力』かあ……俺にはきかないようにしようかな……まあ、後でいいや。

「レミコトとフランはどうしたの？」

俺が紅魔館の主になるんだつたらフランもレミリアも外に出してあげたいしね。ああ、フランとレミリアっていうのは俺の妹にあたる『フラワードール・スカーレット』と『レミリア・スカーレット』の

ことだ。

「まだ二人とも寝てこるのはいつですか。」

まだ寝てるのか…。今何時だろ?

「咲夜。今は何時だ?」

「早朝8時です。」

そりゃ寝てるわな~。吸血鬼つづ夜型だし

「そうか、じゃあ一人の吸血鬼の弱点をなくしに行へが。案内してくれ。」

「了解しました。此方です。」

初めまして。私の名前は『十六夜咲夜』私の朝はいつも早い。私がこの紅魔館の主、桜華・S・T・天月様に拾われてから数年がたつた。あの時のことはよく覚えてる。

あれは私が切り裂きジャックと呼ばれ、殺人をやっていた頃のこと。私は五、六人目を殺した後、私は珍しくミスをしてしまい大怪我をしてしまった時だ。街の近くの森へと隠れていた時、深紅に染まつた館を見つけた。その館は近頃街中で吸血鬼が住む館と噂される所だとすぐに気がついた。私が住む街には館などいくらでもあつたがここまで深紅に染まった館などなく。カタログにのるような普通の館ばかりだつた。血のように紅い赤。一目惚れした。血になれたら私はすごく魅力的にみえ、惹かれてしまった。

その時私は自分が大怪我をしていたことなどすっかり忘れてしぐこの館をのつとることしか考えられなかつた。

今思うとバカをしたものだ。しかし、そのおかげで桜華様に出逢えたのだ。よくやつた、過去の自分。

乗り込んだは良いものの、私は門番に軽くあしらわれてしまつた。その時から今までずっと紅魔館の門番をしていた『紅美鈴』に。

そして怪我のせいもあって私は虫の息にされてしまつた。その時、館からでてきた。まさに幻想的な風貌を纏つた少女が現れた。

「美鈴、どうかした？」

「はい。この人間が館に侵入しようとしてきたので追い払いました

た。もう虫の息ですが。』

『やつ、よくやつたわ。』

そう言つとその少女は私に向かつて歩いてきた。後ろで『危険です』など聞こえてきたが私は無視して少女を必死に見ていた。ただ私に向かつて歩いてくるだけ。それだけなのに私は消えかけている命の灯火を無理やり灯らせて少女をじつとみていた。歩いてくるだけなのに全てが美しく、儂げに見える。一つ一つの仕草が幻想的で思わず惚けてしまつた。

少女は私の前まできて止まると、一言。

『来なさい。』

『来なさい。』。ただの一言が私の心の奥底に響き渡り、瞬時に私はさながら騎士のように膝を地面につけ答えていた。

『黙りました。』

と。その後、私は自身の怪我が完全に消えていたことに気がついた。しかし、不思議と氣にならなかつた。全てこの少女がやつたのだと理解したから。

次の日の朝、私は少女に自分の名前を教え、自分の専属メイド兼紅魔館のメイド長になるように命じてきた。普通なら殺されてもおかしくなかつた状況なのに助けられたことに疑問に思わなかつたと言えば嘘になる。気紛れ？食料にするため？思い浮かぶ全ての考えがその時、全て否定された。普通に。なんでもないかのように。私の考えは全て外された。

「何故生かしたか？簡単よ。欲しかつたから。」

たつたこれだけの言葉。子供のような理由。なのに私はこの言葉でこの少女、桜華・スカーレット・ティレイ・天月様に絶対的な忠誠を誓つた。

このとき、この瞬間。ここに『完全で瀟洒な従者』が生まれた。

私と日陰少女と回書と・・・

「咲夜、案内してくれと頼んだのに悪いんだけどレミリアをフランの部屋まで連れてきてくれないかしら？私も準備とかもあるから能力は使わなくいてもいいわ。」

「かしこまりました。では言つてまいります。」

どうも。なぜか超絶美少女になつていた剛田 桜華改め桜華・S・T・天月です。とにかく言葉づかいを女っぽく、そして紅魔館の主にふさわしいようにしてみました。一人称も俺から私に変えますよ？

今、私は咲夜と別れてフランの部屋に向かっています。え？そんなの知つてる？まあまあ、そんなこと言わずに聞いて下さいよ。実はね？私つて……紅魔館の敷地内がどうなつてるのか全く知らないんですよ。え？いやいや、バカとか言わないでください。私は明久じゃないんですから。

え？そこまでいつてない？それは失礼しました。バカつて言われたら明久と同類と言われてると感じてしまつて……。アホならいいのかつて？いいですよ？むしろどんどん言つてください。アホなのは知つてるので。

今はそんな話をしている時ではありませんでしたね。どうしたらいと思想いますか？

はい。そこあなた。

え？ 能力で敷地内の地図を脳に記憶させればいいって？

いやね？ それも考えたんですけど間違つて脳に損傷とかさしたら危ないじゃですか。え？ それも能力で脳を補助・保護するバリア的なものでも張つたらいいんじゃないかって？

……。それは盲点でした。皆さんつて頭いいんですね？ 違う？ ああ、私の頭がアレなだけなんですね。わかります。

ではさつそく失礼しますね？ ……。はい、できました。ちょっととそこ！ 『うわ～、こいつチートだわ。ウッゼー』とか言わないでください！！ まったく、失礼しちゃいます。せめてアホと言つてくれださい。それなら許します。

「……。なんだか複雑な構造になつてゐるわね。図書館の地下ね。

なんで図書館の下なの？ とか言われそつだから言つときますね。図書館には管理人をしてもらつてる『パチュリー・ノーレッジ』がいる。通称『パチヨ』。パチュリーとは『火+水+木+金+土+日+月を操る程度の能力』を持つてゐる生まれながらの魔法使いと言われてる魔女だ。レミリアとは親友でレミリアの姉である私は必然的に出会うことになつた。そしてパチュリーの力量をしっかりと把握した私はパチュリーを紅魔館の図書館の管理人を任せることにし、フランをできるだけ外に出さないように結界の管理などをしてもらつてゐる……らしい。なんでらしい？ とか聞かないよね？ 私も今知つ

たからに決まってるじゃん。さつき転生してきたばっかだよ？そんな感じ全くしないけど。ずっとここにいましたって言つたほうがなんだか違和感無いんだけどね？

まあ、そんなこんな言つてゐる間についにさやいましたー。図書館のほうだけどね？

「あれ？ 桜華様どうかなさつたんですか？」

「ああ、じゃあ。ひょっとフランに用があつてね。」

この私に声をかけてきた人物は『小悪魔』。通称『「あ』』。この図書館で司書をやってもらつてゐ……らしい。なんでらしい？とかきか？（「？」

「妹様ですか？」

「ええ。とにかくパチエのどいつもこまで連れてつてくれないかしら？」

「わかりました。」

こちらです。と言つて私を誘導する「あ」。司書といつても簡単に言うとパチエのお手伝い的な感じだけど。まあ、パチエは嘆息持ちだからおおいに助かつてゐるんだけどね。え？ そんな設定初めて聞いた？ うつそだ～。私ちゃんと言つたよ？ え？ 言つてない？ ……。えー

とね？うん。なんかごめんなさい。

とにかく嘆息持つてたんだよ。うん。べ、別に言い忘れてたとかじ
やないんだＫ（ｒｙ

「パチュリー様、桜華様がきましたよー。」

私がついて行つた先には本の山があつた。ここはばかりつど図書館の中央部分にある。パチエは大体の時間をここで魔道書を読んだりして過ごしている。パチエはこのあの声を聞くと視線だけこちらによこした。

「あら～邪魔しちゃつたかしら？」

「ええ。今凄くいいところだったのに……」

はたして魔道書にいい所も悪いところもあるのだろうか。気分的な問題なんだろうか？まあ、どうでもいいことだな。

うん？男口調に戻つてる？いやね？説明する時ぐらこ良くなーい？一人称は私だし。いやいやいや、面倒になつたとかじゃないよ？ホントダヨ？

「それは悪かつたわ。ちょっとパチエの負担を少なくしようと思つてたのだけど……いらなによつね？」

「すみませんでした。」

パチュリーはスペルカード『秘技 ジャンピン下座』を使った
よつだ。え? キヤラ崩壊? そんなのじらないゾ

てかじつせつて椅子の上からそんな綺麗なジャンピング下座がで
きるのか不思議なんだけど。何気に魔道書もテーブルの上において
やがるし……。さすがパツチヨさんだね。

「で、具体的に何をしてくれるの?」

「約束通り嘆息を消しに来たのと、フランのお世話をしなくていい
いようににきたわ。どう? うれしい?」

「……別にうれしくなんか」「じゃあ、別にしなくていいわ
ね。」「ないことはないです。はい。」

いきなり不遜な態度をとるからだゾ

約束? 図書館の管理人をやつてもうつ時にいつかやつてあげるつて
言つた適当な口約束……らしく。なんでうらじこ? とか聞か? (「よ

「あいいわ。じゃあ、まず嘆息治すけど、条件があるわ。いい
かじら?」

「……条件によるわね

「簡単よ。嘆息が治るのは私がこの幻想郷内にいるときだけ。」

「……まあいいわ。今までと比べたら全然いいほうよ。他にはあるの？」

「ええ、あと一つだけ。」

「なにかしら？」

本当はこれだけでもいいんだけどね。まあ、最初の条件はこの条件の為の保障よ保障。あつたほうが安心するしね。私のわがままだけだね。

「最後の条件は……ユリシアとフランとのからも仲よくする」とよ。いいわね？」

「……わかったわ。」

なんだか温かい目で見られましたー。あれ？私変なこと言つたかな？まあ、いいや。とにかく嘆息治してあげよう。……はい、治りました。だからそこ！チートチートって言わない！…言つならアホと呼びなさい。それなら許すわ。え？なんでそんなにアホにこだわるかって？知らないわよ！べ、別に突つ込んでほしいとかそんなことなんにも思つてないんだからね！…つ、嘘じやないわよ！…ほん

t (r y

「…………じう？」

「…………なんだか楽になつたわね。成功よ。ありがとウ……つて言ったほうがいいのかしら？」

「こらないわ。条件を守つてくれさえすればね？」

私はそう言って笑う。やっぱり妹には仲よくしてくれるやつがいたほうが安心だからね。無理やりにでも縛つてやるわ。私が幻想郷にいる間はたいてい自由にしてくれて構わないんだけどね。

「そり。じゃあ何も言わないわ。結界は解いておくからうそと行きなさい。私は魔道書の解読に忙しいのよ。」

「クスッ。ええ、そりをさせてもらひつわ。」

パチヨつたらそんな顔を赤くしながらそんな態度とつたつて可愛いだけよ？わかつてゐのかしら。

まあ、今はともかくフランのといひに行きましょうか。多分そろそろ咲夜とミリアも来るといひだろ？

そう思いながら私は螺旋状になつている階段を降り、地下にあるフランの部屋まで行くのだった。

私とフランとユリコアと・・・

やあやあ、私は桜華だよ？知ってる？』「めんねえ～、私最近物忘れひどくてさあ～。え？なんでいつも口調が変わってるかつて？私に会つ口調つてどんなのかなって自分で探しをしているのだよ。……。ちよつと…なんでそこで無反応！？あ、こいつ駄目だ。もう救いようねえわ～とか思ってるんでしょ！？そつなんでしょ！？ふーんだ。いいもんねえ。フランたちで癒されてやるもんねえ～

そんなこんなで螺旋階段を降り切りました！さあこの重そうな扉の向こう側には私の愛しい愛しいフラン・ドールちゃんが待ってるってことだわさ～ムフフ。……。だ～か～ら～！そこで無反応とかマジで困るからやめてくんない！？あれだよ？マジシャンがそれなりに面白いことしたのに反応がなくて悲しくなるあれとおんなじ心理状況だよ！？

「フラン～入るわよ？」

ええ、表ではこの口調ですよ？だつてこれで固定しちゃつたもん。テヘッ……。『メンナサイ。ここで嘔吐物を出すの流石に勘弁してください。流石に私にもやりすぎた感があるからさ。……その、ごめんなさい。男だったっていう感覚がなくなつたんだよ。そういう風に幻想郷全土に認識させたときに私自信にもかかつちゃつたみたいだから……。ジャイアンがこんな『テヘッ』とか言つてたら怖いでしょ？今、あれが現実で起こつてるつて思つてもうつたらわかるかな？…ね？気持ち悪いでしょ？

ま、まあとにかくそのことはおいておこう。やつぱり寝てのかフランからの返答はない。さつき調べてみたんだけど私はフランの部屋には結構な頻度で来ているようだ。レミリアもここに来たがつているけど私がいないときは来ていない。私が規制しているから。私がいなきときは能力が発動してしまった可能性があったから……らしい。今の私は神からチートをもらってるから完全にこの能力を操りきることができるから完全に狂気とかも封印できるし、能力に制限をつけることもできる。つてことでここに来たわけ。

ギイ・・・バタン

「……すうすう……うん?……おねえしゃま?」

(か……かわいい!!かわいすぎる!!何これ!!何これ!!?落ち着くのよ私!素数を数えるのよ!!あれ?素数ってなんだつけ!!?1、2、3、4、5、6、7……つてこれは整数!!え?あれ?なにがどうなってるの?!!)

きつとこのときの私は田がグルグルと回っていたに違いない。ついでかいつの間にか私、抱きついちゃってるんですけど……。

「ん……おねえ様あー(スリスリ)」

「カハツ!?」

しまった。ついつい吐血してしまった。仕方がないよね?あん

なに笑顔で『おねえ様あ～』つていいながら頬に擦りよつてくるのよ？想像できる？あ、やっぱり想像したら駄目よ。フランは私だけのものだもの（キリッ）

「あ～ちょっとフラン～！何勝手に私のお姉さまに抱きついてるのよ～！」

「桜華様、ただいま戻りました。」

と、ここでレミリアと咲夜が部屋に入ってきた。こんな状況でなんだか恥ずかしいけどとにかくポーカーフェイスを能力で保つ私。ん？ていうかレミリアはさつき何て言つた？『私のお姉さま』？え？なにこの萌える展開。完全に予想外なんですけど……。

「フラン、とにかくおきなさい。レミリアもよく來たわね。」

「は～い…ふわあ～」

「当然です！お姉さまが呼ぶならどこへでも行きます～！」

キヤラ崩壊パネエなこの世界。もしかして紅魔館組は私に依存しまくりだつたりする？明日にはバカテスの世界に言つて文月学園入学するてはずなのになあ……だいじょうぶかな？

「ねえ、咲夜？明日から私が能力で人間に化けて外に行くってこ

と詰つたかしりつ。』

とにかく物事を冷静に見れそうな咲夜に聞いてみる。すると、咲夜は眼を大きく見開いて驚いたような顔をする。

「え、聞いておりません！ 桜華様、いつお決めになつたのですか！」

うわー、あの咲夜がすつごい勢いでうろたえる。……。え？ なに？ やっぱり私つてこの紅魔館組に依存されてる？ 私の近くでレミリアとフランも私の言葉を聞いて固まつてる。え？ ちよつと神！ ？

『はい？ 呼びましたか？』

『ええ！ 呼びました！ 文月に行くつてなんで紅魔館組は知らないの！ ？』

『ああ、それはですね。私が面倒だったからですね。』

『そんな理由かい！ ！』

『あ、安心してください。八雲紫ヤクモ ユカリにはちやんと〇〇で貰つたつてことになりますか？』

『そ、そ、そ、後は勝手に何とかしりつでことな……』

『はい。頑張つてください。あ、紅魔館組だけじゃなくて幻想郷の大体のところの人たちはあなたに好意に近い感情を持つてますから。それでは失礼しますね。』

依存は幻想郷全土に広がつてましたとさ……。ハハ……ヤンデレいた
らどうしよ……。

「ちょっと前よ。私も能力を完全に制御できるようになったし、応用もできるようになった。だからパチエの嘆息も治したし、今こうやってレミリアとフランの吸血鬼の弱点をなくしに来た。まあ、制限はつけさせてもらつけどね？」

「では私も付いていきます。私は元々、桜華様専属メイドですか」「う

咲夜がそう言つてくる。あれ? おかしいな……咲夜の眼が怖いよ? 何て言つたらいいのかな? あれだ……レイプ眼? うん、そうそう。そんな感じ。これは見た感じ、咲夜つて私に超依存してるよね。

「……わかつたわ。ならユニアコアとフリンのJとせ美鈴にまかせておきましょ。私たち妖怪からしたら3年ぐらいこすべに終わることだしね。」

「ちょっとお姉さま！私も行きます！！」

「うう～、私も行く～！」

レミリア、フランの順で私も行くと駄々をこねてくる。まあ、予想ぐらいはしてたけど……

「駄目よ。隙間妖怪との契約は連れていくなら最悪一人だけにしろって言われてるのよ。それに、貴方達には私がいない間の紅魔館を守つてほしいのよ。もちろん、美鈴やパチエ達にも頼むけど……。私の妹ならできるわよね？」

そう言いながら私は2人の頭をなでる。そうすると2人は気持ちよさそうに眼を細めるが、私の言葉に不満を感じたみたいで上目使いで頬を膨らませている。

私の言葉、つまり『私の妹ならできる』ってところだと思つ。依存しているならこの言葉は一種の魔法のような言葉にかわる。つまり依存者は依存されているものに『貴方は私の～なのだから出来て当然よね？』と言わると期待に答えようとして『はい！貴方様の為にならなんでも致します！～』といった状況になるのだ。

私はそんな2人に苦笑いをし、2人の頭に手を置いた状態のままで2人の吸血鬼としての弱点を無くす。この能力は基本なんでもできるみたいだけど、こういう少し規模がでかいことは条件をつけなければならぬみたいなのだ。だから、それなりの条件を付けることにする。

「2人の吸血鬼の弱点はなくしたわ。でも、条件として私の幻想郷にいない間はいつもの通り、吸血鬼としての弱点はあるままで、フランの狂気にも封印をさせてもらつたわ。こっちの条件は特にないわ。」

そう言って私は2人をできるだけ優しくなでた後に部屋を出る。

私と隠聞ヒフレゼンアント・・・

「桜華様、何故あるような嘘を？」

フランとレミリアをフランの部屋に残し、自室へと向かう途中で咲夜が私に質問してきた。

嘘といつのはフランの狂氣を封印した事だらう。實際、気づかれないようについつも通りの言動、行動をしたつもりなのだけど……なぜか咲夜にはばれたみたいだ。だけばえて嘘をつく。

「嘘？ なんのことかしら？」

「妹様のことです」

即答する咲夜。

この世界の咲夜はレミコアのことをお嬢様。フランのことを妹様。私のことを桜華様と呼ぶみたいだ。ちなみに紅魔館組のだいたいはこの呼び方らしい。

「フランへ私は既に見当もつかないわね。」

「誤魔化さないで欲しいですね。妹様ほどの狂氣を押さえ込むことに代償を払わないはずがないじゃないですか。」

……気づいただけではなく確信している感じ。

「そうね。でも嘘はついてないわよ~フランには代償がないもの。

」

「やははつやはつでしたか…代償にはなにを?」

少し悲痛な面もちらをした咲夜だが、すぐに元の表情に戻つて聞いてくる。

それに対してわたしはなんでもないかのよつて、明るい声音で返事する。

「死ぬ程痛い激痛

」

そう言つた瞬間咲夜の表情が凍つた。起動に結構かかりそうな感じだから置いていくことにする。いや、決してこの後の咲夜の暴走を想像してしまったとか…そういうのじゃないんだからね！？

そんなこんなで早足で自室に戻る。部屋の扉についている特注品の鍵でしか開かない鍵でロックする。そして念のために私の妖力にしか反応しないチーンを操りロックする。

……むし……

「紫、居るんでしょ、いつまでして欲しいのだけど。」

「あら、よくわかつたわね。」

クパアという擬音と共に空間に両端がリボンでくくられた穴があらわれる。この穴を私や幻想郷に住まう人々は『隙間』^{ヤクモ}と呼んでいる。そしてこの隙間を作り出した張本人こと『八雲』^{ヤクモ}が私の部屋に現れる。

「私だもの」

「そうね。あなただものね」

私の能力に不可能はない！！（キリッ

「まあ、そんなことはおいとくとして……同行者は咲夜になつたわ。まあ、あなたなら見てたのしそうけど……」

「ええ、見てたわ。あなたを。舐めるよ！」

「ナニソレ、コワイ。」

いやいや、マジ怖こんだけビーー・冷せ汗ものビリビリやなこからね、これー

「紫? なにか怒つてる?」

「いいえ？ 別にいつ起るかわからない、死ぬほど痛い激痛という名の発作をなんでもないかのように引き受けたあなたをおもいつきり殴りたいなんて思つてないわよ？」

めうめうめうめう思つてひりひりしゃいますね。有難う御座いました。

知つてる?」「うう」とはスルーした方が身のためなんだよ?

「そう、良かつたわね。で、入学に必要なものについてはどうなの？あ、向こうに行つたら私の能力とか使えないようにするからね？」

「必要なものは貴女の従者に渡しておいたわ。それと、能力についても了解よ。どうせ言つてもきかないのでしょうか？」

「流石ユカリソ、わかつてゐるわね。それじゃ、私は寝るわね。」

そう言って私は紫の返事を聞かずに布団の中に潜った。

おはようから「こんばんわまでありゆる」とに精通する言葉。「こんばんちわ」と言つてみよつと思つた桜華だよ

そろそろ咲夜が呼びにくる頃合いだから部屋にかけてあつたロックを全て外す。すると同時にドアが開く。

「おはようございます、桜華様。咲夜さんがそろそろ準備できるやつですで迎えにきました。」

入ってきたのは咲夜ではなく紅魔館の門番をしている美鈴だった。

「珍しいわね。美鈴が呼びに来るなんて」

いつもなら咲夜が起こして来るように、今日に限つて美鈴だ。少々びっくりするぐらい普通だ。

「桜華様に渡したいものがあったので頼んで変わつて貰つたんですよ」

「渡したいもの?」

美鈴が私にプレゼントだなんて…いつもは門番として私に尽くしてくれるけど、こうして美鈴にプレゼントを貰うのは実は初めてだつたりする。私からプレゼントしたことはあつたけどね。

「いれですよ。」

美鈴から渡されたのは星型の髪留め。正直ひとつかなり嬉しい。

「美鈴、ありがとうございます。宝物にするわね」

「うこうこう」とには満面の笑みでお礼をしてあげるのが筋つてものしい。神からの情報だ。

「い、いえ／／／

美鈴がすうじい照れてる。はつまつお言ひ。可愛いです。はい。

「そ、そ、うだ、美鈴。」の髪留めを私につけてくれないかしら？」

私がそう言つと顔をこの紅魔館のようになに真つ赤にしながら頷いてくれた。動きが力ち「チで、危なつかしいけどこれはこれで良い。

「え、どうじょうか？」

美鈴が私に髪留めを付けた後に手鏡を持つてくる。金髪と青紫色のメッシュで染まつた髪に星が付き、さらにこの姿に幻想的ななにかがついているような気がする。

「上出来よ。流石だわ、美鈴。」

「あ、ありがとうございますー！」

また、そんなに慌てて……襲われたいのかしら……？

……はつ！？男の時の感じがまだ残つてたみたいだ……危ない危ないリアルレズを体験する所だつたわよ……

「あ、そ、うだ。咲夜さんに呼んできつて言われてたんだつた……
あ、桜華様。食堂に行きましょ！」

「ええ、そ、うね。美鈴、エスコートして下さる？」

「まい。よろこんで」

そう言って美鈴は私の手をとつ、食堂へとHスゴートして行った。

私と邂逅ヒアレンセント・・・

「おはようございます、桜華様。そして、中国は死になさー。」

「うひーーー？」

どうも、美鈴のHスコートによつて食堂に来た桜華だよー。

最初は咲夜の罵倒から始まるよー。

幸先いいね！

「おはよう咲夜。いじるのは良いのだけど、やりすぎは駄目よ？
やるなら私の田の畠かないといふでやつてちょうだい」

「畏まつました。（キリッ）

「桜華様ー？そこは助ける所ではー？でいつか咲夜さんも『畏ま
りました（キリッ）』じゃありませんよ…ってー？え？私の服の襟な
んか掴んでどこへ？いやいや、そんな小声で『中国…桜華様と手を
つなぐなんて……妬ましい』とかブツブツ言われても怖いだけです
つてーー…ちょっとやめ… - - - アッ」

…私はなにも見てないよ？いやー、それにしても咲夜と美鈴は仲が
いいなー。

「お姉様、ちょっと食事の前にお腹空かしてくるわね」

「あ、お姉様手伝つよ」

そう言つて、部屋を出て行く妹一人。そういえばレミリアが私のことを『お姉様』。フランが私のことを『お姉ちゃん』。レミリアのことを『お姉様』って呼ぶみたいだ。

それにしてもいい笑顔だったな。心も身体も空気も氷河期に突入したみたいだよ

「それじゃあ先に食べましょつか。」

「ええ、そうね。」

「はいー。」

私の『『いだきま』』と言つ声の後に、部屋に残ったパチエと『『が続いて』』と言つ。木靈ですか？いいえ、いつでも。

「それでもあれね。」

「ええ、そうね。」

「そうですねー。」

「うわ、ほんとうに思つてこないとは同じのよつだ。」

「 美鈴、五月蠅むかご（です）。」

美鈴……南無。

「あ、そうだつたわ。」

なにかを思い出したよつて血身の服についているポケットに手を突つ込むパチ。

「はい、コレ。」

やつぱり渡してきたのは円の形をかたどつたネクタイピンだつた。

「私とこあからのプレゼントよ。それには転移魔術がかけてあつてね。そのネクタイピンに両手をかざして行きたい場所に強く願うと転移できるつて呪物よ。ただ、明確なイメージが必要だから行つたことがないところや、曖昧なイメージだつたら転移できないからね。」

「へえ……ありがと」

「べ、別に礼なんていらないわよ」

「えへへ～」

私がお礼を言いつと照れてるのか、顔を背けながら「パチ」と、完全に照れてますよオーラをだしながら笑う。「あがとてもかわいかつただけ」っておこり。

それにして、パチって嘆息が治つたからか一気に喋るようになつたなあ。うん、良きかな良きかな。

「食事終了」

「咲夜、準備はいいかしら？」

「はい。」

あの後、私達が食べ終わる頃になつてみへやへ咲夜とレミコア、フ

ランが帰ってきた。皆さん顔と手にトマトケチャップがべつたりとついていたのはなんでだろ？ なにか料理でもしてたのかな？ まあ、そんな些細なことはおいといて、私と咲夜はたった今、準備を終えた所だ。

え？ なんの準備かって？

文月学園へ行く準備だよ。今日から私と咲夜は文月学園の第一学年として入学するから、その準備。ま、だいたいは咲夜が早朝に終わらせてたみたいだから確認だけしたのよ。

ちなみに此処は私の部屋だよ。基本私以外入れないようにしているからね、安全なのよ。フランとかレミリアとかがついてこれないよううに私の妖力にしか反応しない鎖があるこの部屋は。

「じゃあ、行きましょうか。」

「はい。」

そう言って私は前方の空間を何故か紫から渡された、紫とお揃いの扇子で縦になぞるように下ろす。

するとそこには幾つもの田が此方を見てくるものがクパアという擬音と共に現れた。所望『隙間』がひらいた。

何故隙間が開くのかとか聞かないでね。良い？ 私の能力に不可能はないのよ。

そして、私と咲夜はその隙間の中に迷いなく入っていった。

（路地裏）

隙間からだとそこは路地裏でしたと。ソフビの時はユカリンから貰ったコレの出番なり！

「ちうずー！」

チーズじゃないよ？地図だよ？ただ単にドラえもん風に言つてみた
かつただけだからね。

あ、咲夜は気にしないで。ただ忠誠心を鼻から垂れ流してるだけだ
から。うん。『ああ、なんて可愛らしいお声で…ふがふが』とか聞
こえないから。うん、キコエナイ。

「えーと、なになに？』この路地裏にそれなりに立派な家があり
ます。それが桜華様達の家です。隙間を開いたりするときはその家
の中でお願いします。紫様が境界を操つて二人以外にそこは行き止
まりにしか見えないようにしてるのであしからず。』…か。立派

ねえ……

ていうか、地図とかまで藍にさせてるのね。ああ、藍つていうのは『ハ雲』ヤクモ『藍』ラン っていう九尾狐の妖獸よ。まあ、藍についてはその内説明することにするわ。

それにしてもこんな路地裏に立派な家なんてあるのかしら。そういう、周りを見渡す。

右 壁

左 壁

上 青空

下 右と左の壁に挟まれた直径1メートル程度の幅の道

後 忠誠心を垂れ流している咲夜＆人々が行き交う商店街

前 永遠邸のような建造物

……あつたね。ていうかコレでそれなりつて……永遠邸の奴らが泣いてそうね。ほとんど隙間開くだけの家なのにこんなに広くして意味はあるのだろうか…

ていうか明らかにこんなにでかい建物がはいるような所ないよね？ああ、もしかして紫がしたのかな？空間の境界でも弄くったのかな？

……やめよ。考えてもわからなーし。

「咲夜、これからあの家の中以外で能力を使つひとを禁止する。いいわね？」

「理解しました。」

咲夜、まず鼻血を拭きましょうか。

それから咲夜が完全に復活するまで待つて、ゆっくりと文理学園へと歩いていくことにした。

いや、したかつた。

「わやつーー？」

路地裏からると、私は誰かとぶつかって尻餅をついてしまった。ついてない。まだ「つちについたばかりなのによどぶつかるなんて。

そつ思つていいと、多分ぶつかった相手であるう女子が話しかけてきた。

「Das tut mir leid. Bist du ok
ay? (す、すみません。大丈夫ですか?)」

うん? ドイツ語?

疑問に思い、ぶつかった女子に目を向ける。そこには知っている顔があつた。

『島田 美波』^{シマダ ミナミ}。バカとテストと召喚獣の原作メンバーの一人だ。

うん。さつきのついてない宣言は取り消すわ。凄くついてる。初めっから原作メンバーと出会うなんて。

とにかく、相手に合わせてドイツ語で話してあげる。

「Mach dir keine Sorgen. Okay,
was Frau? (大丈夫よ。貴女こそ大丈夫かしら?)」

「Usw., in Deutsch!? (ビ、ドイツ語!?)」

どうやら美波は驚いているらしい。当たり前だ。こんな所で聞くとは少しも思つてなかつただろうから。

「Ach, ich war noch vorstellen.
Ich bin eine Kirsche Blume Na

men. Auf diese Weise ist Sakuya
a. Ich bin die Magd von mir. (あ
あ、自己紹介がまだだつたわね。私の名前は桜華よ。で、こつちが
咲夜。私のメイドをしてるわ。)「

私が咲夜のことも紹介すると、咲夜はメイド服のスカートをつまんで軽くお辞儀した。話にはついていくのがが微妙だけど、多分ついていくてるみたいだ。

「Ist es Ihnen? Shimada ist Mi
nami. (は、初めまして。島田 美波です。)」

美波はこの急な展開になんとかついてこれてるみたいだ。

「Es scheint, wie Schülerinnen
und Schüler auch 文月 Dame. . .
Ich sehe die neuen Studenten? (見
たところ貴女も文月学園の生徒みたいだけど. . . 新入生?)」

「『Zu』? So Dame sein? (『も』? ジャあ貴
女も?)」

「Ja. Es ist auch nicht nur mi
r hier Sakuya. Zur Schule sowie
so. Ich wurde zu spät kommen. (ええ。私だけじゃなくこつちの咲夜もね。とにかく学校へ行きまし

よう。遅刻してしまうわ。」

「Huh? - Ja . . . Ich bin kein
Mädchen einheitlich auf eine P
erson . . . Ich bin in der Regel
diese , Dad? (え?う、うん。 . . その人制服じゃなく
てメイド服なんだけど……これが普通なのよね、お父さん。)」

そんなこんなで私は付き人Aこと島田 美波を手にいれた。とにかく入学式当日から遅刻なんてバカな真似はしたくないので少し急ごうと思います。

「Das klingt gut, wenn ich konnte mit der Klasse werden sowieso (どうせなら一緒にクラスになれたら良いわね)」

「Ja. Warte, das ist nicht meine Klassen zusammen, ich werde . . . Ich weiß nicht, was (そうね。ていうか、一緒にクラスじゃなきゃ私はどうしたらいいのかわからなくなるからね...)」

私と美波は文月学園につくまでに結構仲が良くなつた。なんだが、色々な話をしてたら仲良くなつたつて言つた方が良いのかな?

私がロンドンから来た日本人とイギリス人のハーフだ(嘘)とか、大体二十ヶ国語ぐらい喋れるし書ける(本当)とか、妹が超可愛い(話してない)とか...

「Nun, zu mir kommen, wenn es Probleme. Ich werde so viel wie möglich zu helfen. (まあ、困ったことがあつたら私の所へ来なさい。できる限り助けてあげるわ。)」

そう言つた時の美波の目は私を神様かにかと間違えてるんじゃないのかと思えるほど輝いていた。

く、この私が人間ごとにやられるなんて……外界の人間は化け物か……？

「Oh , Hua Kirsche - D h a t t e e i n e K l a s s e T i s c h ! (あ、桜華！クラス表があつたわよ ! !)」

「S i e t a t d i e s (本当みたいね)」

「W a r u m n i c h t ? I s t d a s n i c h t b r a u c h e n , z u l u g e n ! (当たり前でしょ！嘘をつく必要もないじゃない ! !)」

「O h ? I c h g l a u b e , i c h w a r u n h o f f l i c h . S a k u y a ' s g e w e s e n u n s e r e n A n t e i l e r h a l t e n h a b e n . I c h e r l a u b e d i e V e r w e n d u n g d i e s e r F a h i g k e i t . (あら？それは失礼したわ。咲夜、私達の分も見てきて頂戴。今回は能力の使用を許すわ。)」

「畏まりました。」

咲夜：そこはドイツ語で返すといふよ。全く……ノリが悪いんだから。まあ、私の命令に忠実で気が利くメイドなんて咲夜だけなんだし、少しぐらいなら許してあげないこともないのだけども……

それにして、咲夜の私への依存率とかやばいわよね。そろそろヤンデレにならないか怖いわ……。あれ? 手遅れとか聞こえたんだけど……気のせいよね。

「桜華様。どうやら私達全員一年B組のようです。」

「そう、よくやったわ咲夜。Das ganze Jahr ich RASHII B. (全員一年B組らしいわ。)」

「Wirklich? Haben Sie es! Jetzt fühle ich mich jetzt besser! (本当! やつた! これで気が楽になったわ!)」

ほら、そこーー美波を微笑ましく見ないの!! 確かにこの安堵仕切つた顔とか葉月ちゃんに似てるなあとか思つたりするけど、それを顔にだしたらダメよ? ここはポーカーフェイスよ。

「ああ……必至に隠そつとしてる桜華様……なんて可憐い……」

「……」

……私はなにも聞いてない! 見てない! そうよ。私を見た後に体をくねらせて変なことを口走る咲夜なんか見てないわ!!

「すまない。一年B組の場所ってわかるか?」

「ん？」

私の後ろで嬉しがっている女子と悶えている従者がいるなか、一人の男子が私に話しかけてきた。

はつきりいつて驚いた。だつて、こんな変人が一人もいる中、話しかけてくるなんて……どんだけ物好きなのかしら……

とか思つたんだけど、周りを見渡してやつと理由がわかつた。どうやら、いつの間にか時間が過ぎていたようで、私達の周りにはこの男子と私達しかいないみたいだつた。

「あら？ 貴方、一年B組なの？ だつたら丁度良いわ。私達も一年B組だから、一緒に行きましょう。大丈夫よ、この二人は元々変人なだけだから」

「全然大丈夫じゃないんだが！？」

流石ね。その腕（突つ込み）なら世界を狙えるわ。

え？ なんでそんなに乗り気なのかつて？ それはね、目の前にいる男子生徒があの『坂本 雄一』^{サカモト ユウジ}だからよ。そう、あの野性味溢れる何気に凄く優しくてカッコいい雄一くんよ。

「大丈夫よ。だつてここ、文月学園よ？ きっとコレと同等かコレ

以上がいるに違いないわ。」

「何気に友人をコレ扱いか……気持ちはわからんでもねえが……て、どうか文月学園だからって理由で納得できる俺つて……」

「ああさあ、愚痴つてると遅刻するわよ。Sakuya, Miyami. Ich bin schnell gehen. Ein weiteres gutes aber sp?tf?r Sie . . . (咲夜、美波。さつさと行くわよ。遅刻してもいいなら別だけど……)」

「Okay . (わかつたわ。)」

「異なりました。」

そんなこんなで適当に」Let's Go!!

「そういうえば、さつきから話してる言葉は何なんだ?」

「ドイツ語よ。」(うちの美波がドイツからの帰国子女なのよ。で、たまたま道端で出会った私がドイツ語を話せたから一緒に登校してきたってわけ。)

そんなこんなで今、私は1年B組の教室内にいます。ええ、入って

みてすぐ吃驚しました。Fクラスにいた須川君とかFクラス主要メンバーがいたりしたからだ。

まあ、雄一はなんだかはぐれ者つて感じがびんびんしてゐるし、誰も話しかけてこない。だからと言っては何だけど、朝からの付き合いがある私たちが話し相手になつてゐる訳。みた感じ必要なさそうだけね……。

「こっちからも質問いいかしら？」

「ああ。俺に答えられることならな。」

お許しが出たので私は雄一にさつきから気になつていたことを聞いてみることにした。

「あれ……。なんでセーラー服なんかきてるのかしら？」

「知らん。」

一言……。明久がさつき遅刻、ギリギリで教室に入ってきた。もちろん原作通りに文月学園の制服を着ずに女子用のセーラー服を着た明久が。

私と紹介とFルートと・・・

やあやあ、また会ったね。知つとる人もいると思うけど私の名前はジヤイアーナ……じゃなくて、桜華・S・T・天月だよ。いきなり性転換とか転生をされた、哀れな人間だった者だよ。

そんな哀れな人間だった私は今、吸血鬼になつて人間が通つている学校に入ったよ。しかも文月学園だよ?まるで神様が私に原作ブレイクして欲しいと言つてるものだよね?

まあ、そんな私は今、自己紹介をしているよ。

「私の名前は桜華・スカーレット・T・天月。ロンドンから来たイギリス人と日本人のハーフよ。好きな者は家族。嫌いな者は他人に迷惑をかけていることにも気づかない屑よ。よろしくするかは貴方達に任せるわ。」

「私は十六夜 咲夜と申します。桜華様のメイドをさせて頂いております。制服ではなくメイド服を着ておりますが、学園からは許可を得ておりますのであしからず。後、桜華様に何かしようものなら容赦はしません。私も桜華様の物なので勝手に写真に収めたりは遠慮致します。」

私が自己紹介すると、私の次に自己紹介をするはずの咲夜がいきな

り立ち上がり自己紹介を開始する。

これには流石の桜華さんもビックリだ。まあ、ムツツリーーが私を撮ろうとしていたからみたいだけ……いきなり立ち上がって自己紹介をするのはいただけないわね。

「咲夜、ほどほどにしておきなさい。写真は破つたらいいわ。もし、撮影が続くようならカメラを破壊しなさい。自業自得以外のなものでもないのだから文句はないはずよ。」

「……畏まりました。写真は私が全て貰い受けて、カメラを壊す程度にとどめておきます。」

……なに言つちやつてるのこの娘。正々堂々と写真をパクると暴露しちやつてるわよ。まあ、盗撮写真を被写体の使用人が貰い受けるだけだから……問題……ないのか？

それにさつき言つたように他人に迷惑をかけているのに気づかない屑は嫌いなので、可哀想とかはとくに思わないから別にどうでもいい。そう、例えムツツリーーが震えていようとも。

だいたいそんな事をして幻想郷の奴らが黙つてているはずがないしね。私、何故か結構好かれてるから。

「西村教諭、自己紹介を続けて貰つて結構です。貴重な時間を削つてしまい、申し訳御座いませんでした。」

「気にするな。さ、次の奴出てこいー。」

ここでの原作との相違点は担任が無名の先生ではなく、西村教諭に変わっている。

Fクラスルートがたつたとか？

まさか、そんな事はないよね。Fクラスとかマジ勘弁だよ？

「須川 亮です。好きな物は - - - 」

須川 亮。FクラスのFFF団をまとめあげる男。人一倍嫉妬心が強いが、FFF団内でもかなりの常識人に入る。

つまり、Fクラスの人間だ。

というか、今辺りを見回してみたけど……Fクラスの連中ばっかりじゃない！？

神のやつ……もしかして、私をFクラスに入れようとか考えてるんじゃない？

やめてほしいわ。私が嫌いな人種ばかりじゃない。私がFクラスになつたら紫にでも頼んで学園長を齎して……お話して貰おう。

おつ？次は美波みたいね。間違つてたらフォローしてあげますかあ。

「シマダ ミナミ です。よろしくお願いします。」

黒板に漢字です自分の名前を書いた後に、片言で自己紹介する美波。つて、漢字間違てるじゃない……

「Minami, wurde ich Kanji verwechselt. (美波、漢字間違てるわよ。)」

「Huh? (えつ?)」

私が美波の自己紹介に割り込み、漢字の間違いを指摘する。

ちなみに間違えていたのは『島田美波』の『波』の部分を『彼』にしていた。

私の指摘を受けた美波は、慌ててスカートに入っていた自分の名前を漢字で書いた紙を取り出して見比べる。

そして、間違いに気づいて慌てて字を消して『Minami Shimada』と書き直した。

「Cherry Blume. Vielen Dank, Gott sei Dank. (桜華。ありがとうございます。助かったわ。)」

美波は私に笑顔で返す。

私もそんな美波に向かって、笑顔で返す。木靈でしょうか、いいえ、誰でm（r）y

その後に西村教諭が美波がドイツからの帰国子女といつ」とを云え
た後に、日本語に慣れていない美波から一言・・・

「よろしくお願いします。」

・・・とだけ伝えた後に席に戻った。

さて、美波の次は確か雄一だったわね。まあ、やる気なさそうだけ
ど……

「神無月中学出身、坂本雄一だ。」

それだけ言って座った雄一。想像通りの展開に流石の桜華さんもビ
ックリ仰天だよ、全く。

「アイツ、神無月中の……」

「悪鬼羅刹つて噂の……」

「かなりやるヤツらしげぞ……」

噂が広まっているみたいね……まあ、悪い方だけど。人間つて馬鹿ね。噂に左右されるなんて……。前まで人間だつた私が言つ台詞でもないけど。

だんだん思考まで妖怪化してきたみたいね。ま、今となつたらその方が良いけど。

「……フン」

馬鹿にしてるか、興味がないか迷うな。此処まで聞いてみると、原作通りみたいだし寝ても大丈夫かな? やつぱり、夜行性だからか眠気が凄いわけよ……

つてなわけでオヤスミ~

はい、どうも。みんなの味方、桜花さんだよー。

あのね、報告があるんだーなんと、今日から新学年なのです！

えつ？一気に飛びすぎだ？いやね、ちょっと大人の都合つてものもあつてね？気にしちゃ負けだよ（キラッ

あ、『めんなさい。作者が久々に投稿したからテンションあがつて……メタ発言？ナニソレ、オイシイノ？

「桜花様、桜が綺麗ですね。」

「まあね。でも幻想郷には劣るわよ。なんていつたつて『幻想』の集まる場所なのだから……」

そつ。咲夜との会話からわかつた方もいるかもしれないが、今、私は登下校で使用する桜並木を歩いている。ま、一年間通った道だから情緒もなにもあつたもんじゃないけどね。それに、昔の方が空気も何もかもが綺麗だつたし。

「そうですね。西村教諭が見えてきました。」

「朝から暑いわね。ま、あの人も仕事だから仕方がないか……」

それにして、本当に暑いわね。西村教諭はなんであんなに見てるだけで暑苦しくなるのかしら？もしかして『主に相手を暑苦しくさせる程度の能力』でも持つてるんじゃないのかしら？

…… いらないわね。なんでそんな能力を持つているのかしら。ていうか、筋肉マツチヨのオッサンども全員この能力持つてるってことになるんじゃないかしら？

てことは……ボディービルダーが集まつてポーズを決めているところなんか想像すると……うん。死ねるわね。

「西村教諭、おはよづございます。」

「西村・T（鉄人）・宗一教諭、久しぶりですね。」

「おはよう、十六夜。それで、天月はなんで俺をハーフ風にしたんだ？それにさりげなく鉄人呼ばわりするんじゃない。」

「鉄人がだめなら哲人なんてどうでしょう？」

「何が変わったんだ？」

あつ、そうか。実際小説で読むと簡単にわかるけど、普通に話して

いるだけだから勘でくらうしかわかるわけないか。

いやはや、さすが哲人。いいことを教えてくれる。よつ、哲人！」
これからは愛称で『てつちゃん』で呼んであげよう。」

「呼ばんでいいつー。」

「……人の心を呼ぶなんてプライバシーの侵害です。訴えますよ
てつちゃん。」

「貴様が勝手に途中で言つたんだうつ？それと、てつちゃんって
呼ぶな。」

「……てつちゃん。さつさと仕事してください。ほら、私達に渡
すものがあるでしょ、うつ？」

「……天月、そんなに補修室にいきたいのか？まあ……いい。ほ
ら、これがお前たちのクラスだ。」

そうじつてそつぽむくー君ー……。……違つた。間違つて世界で
一番のお姫様な曲を歌いそうになつたよ。ま、そういうつて私たちに
封筒を渡してくるてつちゃんこと西村教諭。

私たちはその封筒を受け取つて速効開ける。中には大きく『Aクラ
ス』と書かれていた。

「天月、お前はAクラスの次席だ。主席は霧島だから、しつかり

とサポートしてやれ。」

「わかりました。では、これで失礼します。」

え？ 西村教諭に対してはなんでそんなに礼儀正しいんだって？ 先生の鏡である西村教諭に礼儀を持つて接するのは当たり前の行為でしょう？

ま、紅魔館の主であるのだから礼儀くらいはわかってないとやっていけないからね。教諭達には基本的にこうした態度で行こうと思つてるわよ。

「咲夜、HRまであと何分かしり？」

「後十分程度は余裕があります。つきましたら紅茶をおいれいたしましょうか？」

「お願ひするわ。さて、咲夜。命令よ。『私が認めた相手以外の言つことを聞くな。』」

『『Yes, Master.』』 桜華様からもうつたこの名にかけて……

そんなやつとりをしながら私と咲夜は学年最高クラスであるAクラスへとゆっくと歩いていく。

ついた後は自己紹介で自習かな？原作ブレイクはしたほうがいいか
しら？

私と邂逅とAクラスと・・・

やあ、みんなー自由と遊の吸血鬼こと桜華ちゃんだぞ

やつぱりこの教師陣は以上と理解したとこだよ。

いやね？今、教室にいるんだけど……バカでかいのよ。高校生の教室じゃないよね。たとえあつたとしても超金持ち校じゃないところの設備はありえないね。

まあ、下のクラスからしたら学習意欲がわくだらうね。こんなクラスで暮らしたいと思うのが普通だらうじ。

Aクラスにも効果はありそうだけどなあ……この設備に慣れたら他の設備なんかじや物足りなくなるだらうし……

「桜花様、紅茶が入りました。」

「そつ、ありがとう咲夜。」

何故だか知らないけど、私と咲夜は一番のりだつた。一人それぞれに配布されているのだから勝手に使ってもいいだらうといつこで勝手に紅茶を飲ませていただいている。

「咲夜、てつちゃんから貰つた生徒表を頂戴。」

「かしこまりました。」

そういうつてAクラスの生徒表を渡す咲夜。実は西村教諭からAクラスの副代表だからという理由で生徒表を渡されたのだ。

覚えておいて損はないだろう。

ここで、私は能力を使つことにする。『幻想を司る程度の能力』で作り出した能力の『ジ・エンド完成』。めだかボックスという厨一設定満載の漫画の生徒会長が使う『アブノーマル異常』だ。実際問題『完全記憶能力』と『完全理解能力』を作り出して、応用させてやつたら一発なんだけどね。

ま、実は授業中とか普通に使つてるんだけどね。え?咲夜には使つなつていつてるのになんて自分で使つてるんだって?

そんなの私だからに決まつてるじゃない。

これこそジャイアニズム。さすが昔はジャイアンと呼ばれた男だぜい。前世の話だし、今は女だけだけどね

「咲夜、もういいわ。覚えたから。」

「かしこまりました。紅茶のお代わりはいかがなさいますか?」

「お願ひするわ。」

といった感じで咲夜と2人でゆっくりとティータイムを楽しんでいたんだけど、そんななか、私たちに近づいてくる勇者がいた。

うん。勇者。出す気はないんだけど、なんだか咲夜が百合百合しい雰囲気をかもしだしているから近づくなんて滅多にないんだけどね。

近づいてくるのは私達がそんな関係じゃないと知っている人間か、ただの空氣を読めない馬鹿ぐらいだろう。

まあ、この人物はその両方でもないみたいだけね。

「……あなたが天月？」

『霧島翔子』。学年主席の天才娘。坂本雄一とは幼馴染で、坂本雄一に恋愛感情を抱いている。普段寡黙な性格だが、雄一が絡んでくるとなにかと『エンジラスな性格に変わってしまう』という、変な性癖の持ち主。まあ、変わるときはだいたい雄一の近くに女子がいる場合のときだけだ。

「ええ。初めてまして霧島。それとも坂本がいいかしら？」

私がそういうと、霧島さんは少し驚いた表情を見せてから、嬉しそうに笑った。

「……まだ霧島でいい。もつすぐ坂本になる予定だから待つて。」

「わかつたわ。」

多分ここにきたのは私が副代表だからだらう。一応挨拶をつてどっこかなか？

一応代表として、副代表の人柄とか見とかないともしもの時にまかせられないからね。

「そういうえば霧島はクラスの人たちの名前は覚えた？」

「……一応は覚えた。」

「そり。もし忘れたりしたら言つてね。一応成績とか特徴とかは頭の中に詰め込んだから。」

「わかつた。」

「そういうえばさ？」

原作ブレイクする？ちょっととかえるぐらいはするかもだけど……。
どうしようかな……もうちょっとキャラが変になつていてる原作キャラもいるしね。

大丈夫か。そんなときは修正力に任せよつ。

ビバ
修正力！！

私と原作開始と試召戦争・・・

やあ、皆の味方の桜華・S・T・天月だよっー！

え？ なんでフルネームかつて？ いや、そろそろ皆私の名前忘れてる
んじゃないかなっておもってね。はつきり言つてみな？ 忘れてただ
る？ うん？ 忘れてない？

嘘だつ！ ！ ！ ！

ネタ？ そうですが何か？

まあ、そんなことは適当にそこにある墓場にポイッして、本題に
戻りましょうか。

やつと原作だよ。今さつき自己紹介が終わって、DクラスとFクラ
スの試召戦争が始まったところだよ。

それで他のクラスは自習。もちろんこのAクラスも同じだ。しかし、
私は自分にあてがわれたパソコンを立ち上げて、学園の監視カメラ
にばれない程度にハッキングをして試召戦争の様子を見ている。犯
罪？ 知らないよ。私達幻想郷に住まうものとしては常識なんてもの

は捨てるものだからね。まあ気にするな（キリッ

「……桜華、何してるの？」

そんなんか、我らが代表である霧島翔子が話しかけてきた。あの後、話し合つていたら結構氣があつたので名前で呼び合つことにしている。雄一の話をすると簡単だつた。私に雄一をビリビリするつもりもないとわかるとさらに好感度がアップしたのは言うまでもない

「今行われている試合戦争の様子を見ているのよ。なぜ見れるいるのかは企業秘密。企業じゃないとかいう突つ込みおいらないわ。

「……そう。私も見ていい？」

「ええ。」

（――――――）霧島翔子が仲間になつた（――――）

なにかのテロップが流れたような氣がするけど氣にしない。気にしたら負けのような氣がするから。異論認めない。

「へえ、代表達面白いことしてるね。わたしも入れてよ。」

「ていうかそれって犯罪じゃ……」

などとほざいて……などと言って私たちの会話に入ってきたのは『工藤愛子』と『木下優子』の2人だ。

工藤愛子は一年の保健体育に限つて第一位の実力者だ。本人は実技が得意のどと言つてゐるが、実際はただの生娘である。ま、私が勝手にそう思つてゐるだけだけね。

木下優子。彼女は優等生を演じてゐるただのB-S好きの腐女子。彼の弟も演劇のホープなので、演じることに関しては結構すごかつたりする。

「あら？ いいわよ。ちなみにこれは犯罪じゃないわ。犯罪だとしどももみ消せる自信はあるから大丈夫よ。」

「それ、大丈夫じゃないわよ……？」

「まあ、いいわ。それにビツヤリFクラスには『姫路ヒメジ瑞希ミズキ』がいるようだしね。」

「え？ そうなの？」

「ええ、そのようよ。それに……ビツヤリ最終的な目標はAクラスみたいね。」

『一・二』

私がそういうところの話を聞いていた生徒全員が驚いた顔をした。そして、私に注目が集まる。皆の表情には「正気か?」とか「なにを馬鹿なことを……」などといった色々な表情になつてゐるのが見える。

「EのDクラスとの戦いは多分Fクラスの人たちに召喚獣の扱いを慣れさせるため。姫路がいるからEクラスは相手にならないからDクラスを狙つたんだとおもう。そして、この試召戦争が終わつたらBクラスと戦うと思う。Dクラスを狙つたのはBクラスの室外機がDクラスにあるからもあるだろうし……。そしてこの二つのクラスに勝つたとしたらD、B両方に交渉で戦争が終わつたことにして、Aクラスを攻め込んでくるでしょうね。」

「でもそんなことしてもFクラスはAクラスに勝てないわよ?」

「そう。そこでも多分こうこうでしようね。『俺達は代表戦を申し込む。』ってね。これで勝てる方法があるんでしよう。Fクラスの代表とAクラスの代表は幼馴染だし、こっちの代表のことを色々と知つてるんだろうから簡単に作戦は立てられると思うわ。馬鹿見たな話だけど……この様子を見た限りだと多分間違いないわ。」

「……私も桜華の言つてゐる通りだと思つ。雄一ならやりかねない。」

「私も桜華ちゃんと一緒かなあ。多分そのままの勢いでここまで登つてくると思うよ。Bクラスの代表は根本君らしいから苦戦はするだろけど、代表の幼馴染なら上がつてくるでしょ。」

……いや、それはどうこう理屈の愛子。代表の幼馴染だからと詮つて過大評価はよくないよ？

まあ、皆がなるほど、なみたいな顔しやがるから突つ込めないんだけど……私が間違ってるの？私がだけがアウォーなの？

き、気にしたら負けね。

「だから優子、対策考えておいて。五対五にするなりしてできるだけこっちに有利な状況作り出して。いざというときは咲夜を付けるわ。」

「わ、わかったわ。考えておく。十六夜さんもフォローをよろしくね。」

「かしこまりました。」

さあ、これで原作を変える地盤は少しほは整ったかな？

これからが本番だ。せっかく変えたのに修正力で元に戻されないよう頑張らないとね。

私と原作破壊と試験召喚戦争・・・（前書き）

原作ブレイク入ります。

（雄一 side ）

とうとうBクラスに勝った。Bクラス代表が”あの”根本だつたときは流石に少し警戒してしまつたのは当たり前だと思つ。

まあ、一応弱味は握つたことだしこれからは多分大丈夫だろう。

しかし、一番の問題はこれからだ。Aクラスにはあいつらがいるからな……。はつきり言つてしまつと不安しかない。

此方は姫路、ムツツリーニを中心にして計画を立てなければならぬのに対し、Aクラスは全員が全員好成績。つまり、姫路、ムツツリーニクラスがうじゅうじゅういやがる。

それに、今考へてゐる計画が失敗したら、一番の問題である、桜華・S・T・天月とその従者、十六夜咲夜を一気に相手しなければならなくなる。

はつきりいつて翔子を相手するより厄介だ。なんせ『テストの残り時間數十分で』学年次席と参席の座についているのだから。しかも翔子によると、それが翔子の点数の10点差以内だとかいいやがる。ふざけていふとしか思えない。

まあ、しかし……頑張るしか……ないんだよな……。

……いや、詰んでるだろ。

＼ 桜華 side ／

ヤツホーッ！いやに女性にモテモテな桜華さんだよ～（笑）

いや、『（笑）』じやねえよ……。なんで女性にモテモテなの、私
……。結構自身なくすよ～？

しかもあれでしょ？優子の弟なんか男子にモテモテなんでしょ？

ははっ、笑っちゃうよねー。笑っちゃいたいなー。でも笑えない。
何故なら同士だから。

涙がでちゃう……だつて吸血鬼だもん

「なに泣いてるのよ副代表……。そろそろなんでしょう？」

「気にしないで、コレは汗だから……。まあ、せいや。はつきり
言って咲夜だけで大丈夫だと思つけど……。」

何故だか知らないけど交渉に出る」とになったみたいなんだ。

らんりんるー

いやね？優子が『私、副代表、違う。お前、出る。』とか言つから
代わることになつたんだ。面倒なんだなー、コレが。

ま、一応クラスの皆さんにはこの交渉によつて出る結果がどうなつ
ても良いというお言葉を貰つたからこいつだね。

あ、ちなみに女装男児根本ちやんは来たよ？要件はわかつたから
さつせと帰つて貰つたけどね。

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試合戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

とうとう雄一達が来た。まったく……待ちくたびれたよ。

まあ、狙いはわかつてゐるからね。大胆に行つてみようかと思つ。

「雄一、そんな都合が良い条件が通ると本当に思つてゐるのかしら？」

「……そうだな。（くそつ、翔子や木下姉なら簡単に行くんどうが……よりによつてこいつが交渉にでるとはな）」

「私にそんな策は通用しないことはあなただけよく知つてゐるでしょ？……じうせ、代表同士の一騎打ちを拒否しようとする動作を此方が見せたら『ロクラス、Bクラスが攻め込むぞ』とでも言つつもりだつたんでしょう？あ、そうそう。知つてる？私達はCクラスと仲が良いのよ？だつて、危うくFクラスにバカにされながら騙されることをあなた達が来る前に伝えたのだから。怒り浸透してたわねえ……だつて、自分達よりバカばかりが集まるFクラスにバカにされたのだから……。そうね。雄一なら五対五の勝負にしたかったのだろうけど……どうする？本当に五対五にしたいの？別に私は良いわよ？私達に三勝できる自信があるのならね。」

「……。」

文が長いね。うん、なんかじめんなさい。
で、でも凄くない？コレを一息で言つたんだよ！？
褒めてくれてもいいぐらいの凄さだよ！

えつ？ウザイ？

「めんなさい（・・・）シヨン

なんだか雄一達Fクラスが黙り込んでしまった。まあ、仕方ないかな
？自分が考えていた策が完全によまれてたんだから。

Aクラスもなんだか凄く静かなんだけど……ま、いつか。

べ、別に静かな中で小さく『シヨン』としてる桜華様なんて……桜華
様なんて……（ブシャアアアアア』とか聞いてなんかないんだから
ねつ！－

「……返事もないのかしら？まあ、いいわ。そんなあなた達に妥
協案をあげても良いわ。」

「……聞け。」

雄一の元気がない。この妥協案に頼るしかないのだから仕方がない
ことでもある。

そんな中、私は唇を開く。

-----「私達Aクラス、Cクラス、Eクラスは同盟をくんでいます。そんな私達にあなた達Bクラス、Dクラス、Fクラスがチームを組んで学年戦争をしましょう。」

私と優子と作戦と・・・

「雄一、どうする? どうせこのまま戦つたら負けるんだし……賭けてみる価値はあるわよ?」

私は笑う。

楽しそうに。

狂気じみた笑いをする。

そんな私を真っ直ぐ真剣な眼差しで見つめる雄一。数分は見つめ合つた。その数分が周りには何十分に感じたのかもしれない。

やがて、雄一は目を伏せた。そして、次に顔を上げた時に見せた表情は何かを覚悟したような眼をしていた。

「……交渉、成立のようね。」

なにも語らずとも雄一の鋭い瞳がすべてを語っていた。

後ろで翔子が悶えているのが手にとるようにわかる。今の雄一にはそれだけのカリスマがあるので仕方がないのかもしれない。

「提案だ。」の試合、負けた方がクラスに一つずつなんでも書つことを聞く……なんてどうだ？」

「あら、良いのかしら？ わざわざそんなこと言つて……後悔するわよ？」

「しなこ。俺たちが勝つんだからな。」

「へえ……いいわ。その挑発、乗つてあげる。試合開始は今日の昼休みの鐘が鳴つた瞬間に開始する。勝敗はそれぞれのクラス代表を討ち取ること。……こんなとこかしら？」

「ああ、交渉成立だ。」

そう言って雄一達は自身のクラスへと帰つていった。

ああ……原作ブレイクつて、なんてゾクゾクするのかしら

それが私が感じたことだった。相手側の代表と天月さんとの交渉は壮絶の一言だった。

いや、もうあれば天月さんの蹂躪とよんでもいいぐらいの激しさだつた。

私と天月さんはつい最近知り合つたばかりだけ……女子の皆が惚れるのも無理ないわね……実際に私も……危ないしね……

「聞いていた通りになつたわ。誰かじクラスとEクラスに今回のことを使った上で連れてきてちょうだい。」

さつきまで交渉をしていた天月さんが教卓にたつて指示をだす。副代表である天月さんの言葉にすぐに従つAクラスのみんな。

「翔子はこっちにきてくれないかしら。作戦に穴がないか調べた
いから。」

「……わかつた。」

作戦？ いつのまに作戦を？ Fクラスの代表達が帰つてからまだ五分とたつていないので……。やつぱり代表や副代表との差は凄そうだなあ……

それにもしても……天月さん、格好良かつたな……私と秀吉の違いも完全に見分けてたし……。

やばいわね。本気になっちゃいそう。

（咲夜 side ）

ああ、桜華様。なんて美しいのですかっ！？ああ、桜華様のあの真剣な瞳がすごく……すごくいいい！あの瞳で私を貫いて下さい！もう、私、我慢ができません。どうかこのような不甲斐ない咲夜をお許し下さい、桜華様っ！！私は……もう無理ですっ！！

そ、そんなつ……このような状況で誰にも気づかれないようにシューんとする桜華様……

「シューんとする桜華様なんて……桜華様なんて……（ブシャアアアアアアアアアアアッ！――！――！――！――！――！――！）」

（桜華 side ）

やつと視点が帰ってきた。

なんだか微妙に変なモノが入ってきたよつた『気もしないことないけど……あまり気にしないよつにしましょう。寒氣がするしね。

「……………つてどりぬよ。質問は？」

「桜華様、よひじこでしょうか？」

「なにかしりつ？」

「『』の作戦をする場合、私達はどうするのよつうか？」

「ふふつ、それは勿論決まつてゐるわ。」

今からが楽しみね。

私と開戦と学年戦争・・・

只今の時刻、午後1時35分。

昼休みが終わる時間。

そんな時刻に私達は鬪氣を身体中に巡らせていた。

今から起ころる『戦争』はこの学園が始まって以来の例外。私達Aクラスと、同盟を組んでいるCクラス、Eクラス。そして、Fクラス、Bクラス、Dクラスとが同盟を組み戦争をする異例の『戦争』。

そんな『戦争』の火蓋が今落とされようとしているのだ。

こんなに緊張感がする戦いは私達『幻想郷』に住まう者には日常茶飯のこと、『スペルカードルール』によつて物凄く盛大な戦争ともいえるぐらいのことをしているのだから……。

だが、今回は少し訳が違う。

初めての試験召喚戦争を行うのだ。普通なら不安が重くのしかかるのだろうが、私は違う。

楽しい。

いや、嬉しいのだ。

これが吸血鬼としての性か、今の私は戦闘に飢えている。

-----そんな私の状況などござ知らず、

-----昼休み終了の合図は、

-----鳴る。

「前線部隊、突撃せよっ！..」

さあ、楽しくなるわよ？

＼ 咲夜（眞面目ver.） side ／

私は今、前線で桜華様が考えられた作戦の第一段階を成功させる為

に最前線で部隊長である上藤愛子様の隣で戦況を見ています。

「十六夜さん、天月さんが言つてた通りになると思つ?」

指令が一息ついたのか上藤様が私に話しかけてきた。

「勿論です。ならない通りなど一寸たりとも御座いません。」

「そつか……ふふ、信頼してるんだね」

「ええ、私の全てを捧げた唯一無二の主ですから。」

ええ、信頼しないはずがありません。私達紅魔館に住まう者が桜華様を信頼しないなんてことはありえないのです。

何故なら全員が桜華様になんらかの形で助けられたりし、揺るぎない忠誠を誓つてゐるのですから。

そう。全員です。

妖精も魔法使いも悪魔も人間も。

こんな私も。

それに、桜華様は一度言つてくれた言葉があります。今も心に残る言葉。

それは私が『なんで無償で、時には自分が傷ついてまで私達を助けるのか。』と聞いた時でした。

そんな質問に桜華様は

「なんで私が無償に助けるか……。そんなの決まつてるじゃない。私達が『家族』だからよ。』

歓喜で体が震えたのをよく覚えています。元々この紅魔館を乗つ取るつもりでやつてきた私を家族として扱ってくれたことに心がとても暖かくなり、涙が込み上げてきた。あの日のことは忘れようとも忘れられません。

「十六夜さん? どうしたの?」

おっと、どうやら思つて出に漫りすぎたようですね。

駄目ですね。私は完全で洒落なメイドでないといけないのに。……
例外を除いて。

「大丈夫です。なにかありましたか?」

「うん。伝令が来て『作戦通り。既に作戦は遂行せし。』だつ

て。どうやら天月さんの言った通りになつたみたいだよ。

「そうですか。でしたらそろそろ此方も来る頃でしちゃうね。」

流石桜華様です。始まつて10分で作戦 を成功させるなんて……。

此方もあなたの期待に沿えるよつ、頑張りせて頂きます。

（咲夜 side out ）

「 小山友香 side 」

初めまして……になるのかしらね。実際に桜華と会ったのはあの時
が初めてだったしね。

ある日、私が恭一の悪巧みに付き合つてFクラスを叩きのめそ
した時だったわ。

突然私達の教室の扉が開いた。その時は恭一もいて、作戦を考え
いた時だったから警戒していくて、扉の前に見張りを立たせていたの
にも関わらず。

当然私達は戦闘体制に入った。もしもそれがFクラスだった場合は
すぐに叩きのめす為に。

しかし、それは違った。良い意味でね。

「少し、良いかしら?」

私達のクラスに入ってきたのは今、女子達（先生含む）の間で噂になつてゐる桜華・S・T・天月だつた。

桜華は私達の返事など聞く気もないみたいで、返事を言つ前にこいつさと私達が座つてゐる机えとテクテクと歩いてきた。

話しを聞く気がないことに腹が立ちはしたけど、何故かそれが普通に感じたのは今世紀中最大の疑問ね。

「どうやらそれは恭一も同じみたいだつた。

「单刀直入に言つわ。小山友香さん、それどじクラスの皆さん、予言してあげる。貴方達はAクラスの木下優子さんに変装したFクラスの木下秀吉くんに、Fクラス代表の命令で確實にバカにされるわ。」

それだけ言つて去つていく桜華。意味が分からぬ。

なんで私達があのFクラスにバカにされるのかしら?

周りの生徒達は「でた! 正解率99.99%の天月さんの予言!...」とか、「ああ、天月さん、あなたはなんで天月さんなの?...?」とか言つて、なにか興奮した様子だつた。

しかし、正解率99.99%ね……。

信じてみる価値はありそうね。

後日、私達は本当に馬鹿にされた。

彼女、桜華がいつた通りの展開に陥った。

本当に……桜華は何者なの？

私はその答えを聞くためにAクラスへとすぐに向かった。もちろん、見張られているといふことも視野に入れて、激怒したふりをしながらね。

Aクラスで桜華を見つけ、話しかけようと近づいてみると、そこにはAクラス代表の霧島翔子と優等生の木下優子、学年三席の久保利光、そして転校生の工藤愛子と桜華の従者で名高い十六夜咲夜が集まって桜華のパソコンを覗きこんでいた。

私もなんだか気になつたから隙間から覗き込んでみると、そのパソコンに映つていたのはたつた今起きているBクラスとFクラスの試験召喚戦争の様子だった。

……ていうか、完全に犯罪よね……それ。

「なにしてるのよ。」

「あ、やつと来たみたいね。咲夜、紅茶を淹れて頂戴。さ、なに突つ立つてるの？さつさと座りなさい。」

「え、ええ。」

やつと来た？私が来ることがわかつていたのね。まあ、あんな予知ができるへりいだからこれくらい簡単か。

それにしても相変わらず上から田線ね。何故か心地よい感じはするけど……。

「さて、貴方の質問は無視するわ。なんぞ聞かれようがスルーするわよ。で、今から書るのが私の計画。作戦名は『作戦』よ。」

「…………。」

なんにも書ひ気になれない。上から田線過ぎのでしょ……。

しかも作戦 つて……それっぽい感じでいつてるけど、全然ネーミングセンスないから……。

「桜華様、紅茶です。」

「ありがと。じゃ、話しましょ。私の作戦を。」

「友香、話しつてなんだ。この学年戦争で手を抜けとかなら断る

ぞ。いつも失った信頼を取り戻さなきやなんないんだ。」

「違うわ。恭一、貴方達Bクラスには私達へと寝返つて欲しいのよ。貴方だつてFクラスに仕返ししたいでしょ？それに、コレはチヤンスよ。Fクラスを試験召喚戦争でのルールにのつとり、3ヶ月間の宣戦布告行為を奪つてしまえば貴方は簡単に失った信頼を得ることができるわ。

コレこそが作戦。Fクラス連合チームの最大戦力であるBクラスを味方につける。これをしてしまえば彼らFクラスが待つのはたつた一つ。

それは『戦死』。

「……詳しく聞かせろ。」

「そうね。詳しくは作戦を考えた桜華に聞いてくれない？私はBクラスが寝返つてくれるようならいつ寝返るかを言つのを命じられただけだから。」

実際その通りだ。そして、この場所は桜華によつて監視されている。どうやら私がBクラスに襲われた時のようだ。私のスカートに入っている小型発信機をオンにしたら十六夜さんが速攻で駆けつけるついていたけど……本当のかしら……

「……。」

やつぱり簡単には頷かないわよね。まあ、流石は桜華、いつなること
も予知してたか……

「…………やうやう。桜華はこいつも言っていたわ。『負けた者が勝つ
た者に『卑怯者』と罵るのはただの負け惜しみ。勝てば官軍よ。』
ってね。確か恭一の思考と一緒にだつたわよね。」

揺らいだ。今、嬉しそうに笑つた。同じ思考をしている人に出会つ
たからかしら？

そういうのは私にはわからないからなあ……

「…………良一だらう。こいつ寝返ればいいい？」

「…………姫路瑞希、または土屋康太が戦死したときだぞうよ。」

伝えることは伝えたし、今は敵同士。あまつ頃話してること今回の
計画が感づかれるし、帰るとしあしよ。

「じゃ、帰るわね。」

「わいわい。」

やのじとを恭一もわかつてこむのか、簡単に返してくれた。

やうごんば、十六夜わんに貰つた」の『桜華・S・T・天月を愛する僕』についての「どうしようかしら……しかもNO・5つて……友達でもNO・630だったのに。

私と最前線と学年戦争・・・（前書き）

少し長くなりました。これだけなのに、考えてみると……頭が痛くなりました。orz

出番がやつてきました桜華さんです。友香に突っ込まれたり、咲夜が不自然に真面目になつたりしたような気もしないでもありませんが……気にしないでおきます。

いえ、むしろ無視します。

だつて……感じちゃうんだm(_ _)y

「副代表、どうやら姫路瑞希と土屋康太がFクラス本拠地を出撃したようです。」

「了解、貴方は次の段階に移る準備をするように翔子と優子についておいてくれる？私は根本君に用があるから……」

「わかりました。御武運を……」

なんだかこうやつて聞いてると伝令の人つてイケメンだよね。でもさ、知ってる？この子、女の子なんだよ？

顔を赤らめて私と話してるんだよ？

風邪かな？

とか定番なことを言つ桜華さんではありませんよ。ええ。だつて幻想郷でこいつの反応は見飽きてるんですけども

いや、テンションあげてるけどね、無理だから。なんで性転換して女の子に好かれないといけないのよ。そんなことなら前世の時の『俺』を好いてちょうだい……

「天月部隊、そろそろ準備しておいて。最前線にいるのはBクラスとFクラスだけど、できるだけ点数を減らさないように注意しない。Bクラスも一応仲間だからできるだけ戦死させないようにね。

「了解です、お姉さまっ！！」

やめてっ！これ以上私の精神力を削らないでっ！！

ふふ、
ふふふふ負腐怖。
……咲夜……あなたよね。

あなたのせいよね？だつてこの前『桜華・S・T・天月を愛する会』N.O.O.って書いてあるカード隠し持つてたしねえ……。貴女がこの意味の分からない会の創設者つてことはN.O.O.の時点でわかりきつていることよ。

どうしようかしら……なにか罰でも与えてみようかしら……たとえば犬耳、尻尾、首輪をつけて四つん這いにして犬言葉を話させて一日中私のいいなりになるつていうのは……駄目ね。逆に興奮してそうだわ。あれ? もうどうしようもない?

アハハ……そのうち家ででもしようかしら？靈夢とか魔理沙の家で
も行くか、紫の家にいくかね。紫の家なら安全だけど……。

「伝令つー土屋康太と姫路瑞希が戦死致しましたっ！！！」

「わかつたわ。……皆、時は来たわ。私達Aクラスはこれより最前線を突き抜けFクラス本拠地へと攻撃する。今こそAクラスとFクラスとの格の違いを見せつけるときよ。破滅をもたらせつ！邪魔する者は『力（学力）』を持つて切り捨てるつ！！さあ、蹂躪せよつ！！！」

（咲夜side）

「そろそろ向こうも出でんをえないでしょ。工藤様、準備をいせおいてください。」

「オッケー、腕がなるね」

そう言つて前方を自信満々の表情で前方、工藤様の相手である土屋康太様がいるであろう方向を見ています。

私も相手することになる姫路瑞希様がいるであろう方向を静かに見据える。

はっきり言つてしまえば簡単に倒せるでしょう。此方は桜華様によつて相手側の主戦力の腕輪の能力、武器、操作技術、操縦者の性格を全て教えて貰つた情報がありますから。

これだけの情報があるだけでも有利ですのに、さらに私達は霧島様と桜華様に少々勉強を教えて貰いました。私と工藤様、木下様、小山様の4人は個人差はあるでしょうが、おそらくプラス100点いつているでしょう。

なんといつたつて私が一種の閉鎖空間を能力の応用で作り出し、時間を探して1日徹夜したのですから。

もちろん、時間を遅くしただけですので寝る時間はしっかりと作りましたよ？

これぐらい、完全で瀟洒なメイドの私にとつて当たり前ですわ。

「伝令、目標が来ましたっ！」

「分かりました。では工藤様、『作戦』を開始致しましょう。

「うん。じゃ、行こっか」

私と工藤様を中心に、他のAクラスの比較的得点が高いモブky: 生徒が囲み、『作戦』のターゲットである姫路様と土屋様の所まで突進を仕掛けます。

幸い、ターゲットはFクラス本拠地への直線ルートにいるので、二人は自分がターゲットだとは一寸たりとも思つてはいなでしよう。

『作戦』とは、そういうた心理をも組み込んで考えられた作戦なのです。

「と、止まって下を一つ！」

「…………これ以上は行かせない。」

想像通り立ちふさがりましたか……。流石桜華様です。『運命を操る程度の能力』でもお使いになられたのでしょうか？それともただの『アノーマル』異常なのでしょうか？

まあ、どちらにしよ私が桜華様に忠義を違えることは『絶対』にあり得ませんがね。

「敵、最大戦力級を発見しました。十六夜部隊の方の一人は霧島様に報告を。そのほかの十六夜部隊の方は第一防衛ラインについて下さい。工藤様の部隊は展開し、私達の戦いに邪魔が入らないように第一防衛ラインにて防衛に徹底して下さい。」

「…………十六夜さん。私の仕事とらないでほしいな…………。」

どうやら桜華様のご命令が達成になり、嬉しそうに出てきた真似をしてしまったみたいですね。工藤様のお仕事をとつてしまつなど、完全で洒落なメイドとして失格ですね。

私達がいう『第一防衛ライン』とは私と工藤様から7m程離れた墓所のことです。工藤様の部隊の方々はそこで私たちを囲むようにして邪魔が入らないようにしてくれています。『第一防衛ライン』とは私と工藤様から5mほど離れた場所で、そこでは第一防衛ラインの方々より少し点数が高い方々が蟻を一匹も通さないような勢いで頑張ってくれています。

当然ですよね。私が泣く泣く会員である十六夜部隊の方に『桜華様が涙目で此方を上目使いをしながらみている写真』をコピーして配つていてるのですから。

もちろん、このことは桜華様は知りません。なんせ時間を止めて写真を撮つていてるのですから。あ、私の会は創設者である私以外はコピー禁止です。もし、私以外がそんなことしようものなら1000人以上いる会員達が怒りの鉄槌を下すことでしょう。

「すみません。どうやら有頂天になりすぎたようですね。」

「大丈夫だよ。的確な判断だつたし、私だったらあそこまで的確に言つことはできないよ。それより、相手さんがお待ちみたいだよ？」

「そのようですね。」

私としたことが……まさか、今回のターゲットである一人を視界に抑えることを忘れるなんて……。しかし、わざわざ私たちが話し終わるのを待つっていたのですか？

いい人ですね。……完全で瀟洒なメイドとしての意地がある今の状態でなければ……十六夜咲夜の状態であればいい友人で有れたでしょう。

「えーと……もういいんですか?」

「ええ。お待ちいただいてありがとうございます。今回、姫路様のお相手を務めさせていただきます。十六夜咲夜と申します。どうか本気でかかって来てください。試験召喚サモンつー」

「えつー? いや、こいつはよろしくお願いしますつーせ、試験召喚サモンつー!」

私のようなメイドとは会つたことがないのか、うろたえながら試験召喚獣を召喚する姫路様。……おしいですね。コレが桜華様だったら……ああ、いけません桜華様! そ、そんな……ああ……(ブシャアアアアアアアア)

「え……と、だい……丈夫なんですか……?」

「ええ。問題ありません。(ポタポタ)」

「…………同類の匂い(キヨロキヨロ)」

失礼ですね。土屋様。貴方みたいな変態でエロのことしか頭にないことが理由で『ムツツリー』とまで呼ばれるようになった方と一

緒にしないでいただきたいです。私は『桜華様だけ』を愛し、愛で、時にはフィルムに収め、写真を現像し、ファイルに保管し、それが現在500を超えるとし、愛玩動物を見るような眼で見て いるだけですのに……。

「あははは……十六夜さんは変わらないね。」「

「ありがとうございます。」

「いや、壊めてないんだけど……。まあいいや。いつでも始めよ
つか、ムツツリー二君?」

「…………ムツツリなんかじゃない（ブンブン）」

どの口が言いますか……ああ、その口ですね。失礼いたしました。あちらも始めるようですのでこちらも攻撃させてもらうとしましょう。あちらはいつ攻撃したらいいのかわからない様子ですし。

卑怯？そんなものはどうでもいいです。私は桜華様だけの評価があつたらそれだけで……。

「『時空幻想奇術発動』。【幻符『殺人ドール』】。モタモタしていますと、串刺しになりますよ?」

「え？ 何が？」

『シャーラルメント・ファンタジア』

『時空幻想奇術』。私が使う腕輪の能力を発動する為に言わなければならぬ発動キーです。桜華様が学園長に脅して……お願いして作つた少し変わつた腕輪の能力。幻想郷で使われる『スペルカード』を召喚獣用にした腕輪です。ちなみに桜華様もこれと同じような設定がされています。今回私が使つたのは【幻符『殺人ドール』】の劣化版です。ちなみに一回使うごとに100点です。燃費は微妙にいいので、重宝しています。後一つ、この腕輪には能力があるので、それが、それはまたの機会に話すとしましょう。

申し遅れましたが、私の召喚獣の姿はミニスカートのメイド服姿。武器は私がいつも常備しているシルバー制の特注ナイフ。動物は犬……でしょうか？

「おいしいですね。」

「いきなりなにするんですかっ！？」

「いま、戦闘中ですよ？ 攻撃するのは当たり前でしょう？」

とつさに大剣で弾いたようですがいくつかは刺さつたようです。少しは点数を下げることに成功しました。

『Aクラス 十六夜 咲夜 化学 658点

VS

Fクラス 姫路 瑞希 化学 403点

『Aクラス 十六夜 咲夜 化学 558点
VS
Fクラス 姫路 瑞希 化学 296点』

まあまあ、の成果ですね。

それにして、これで仕留められると思ったのですが……流石に三戦もすると操作技術が上がっていますね。といつことは案外Fクラスの幹部クラスが一番の難関なのでしょうか？

まあ、今はこの作戦の成功の為に尽力を頑張りましょう。

「そろそろ補習を受けたくなつてきたんじやありませんか？」

「そんなわけありませんっ！私はFクラスの皆さんのために頑張りたいんですっ！」

「姫路さん。あなたのそれは美学ですが、私達からしたらそれはただの甘い人が言つセリフなんですよ？」

元々闇の世界で生きてきた私達紅魔館の人間はそういう甘さが一番嫌いなんですよ。まだ、あ私でよかったです。その言葉を桜華様の前で言つと徹底的に『壊されますよ？』

「…………さつと終わらせましょ。『時空幻想奇術発動』『咲夜の世界』」

私がそう告げた瞬間、世界が止まつた。私はそんなことを気にせず召喚獣に持つて いるナイフを姫路様の召喚獣の心臓部分に投げるよつて指示する。

「『そして世界は動き出す』」

「ヒュン……グサッ

「…………え？」

なにが起きたかわからず に呆然とする姫路様。

「すみません。私にとつて桜華様の命は全てなんです。」

「戦死者は補習つ……」

ふう、なかなか疲れるものですね。これならやはり自分で戦闘したほうが楽な気がします。

西村教諭もなかなかに大変ですね。Fクラスの担任、補習までしておきながら普通の先生がするよつた書類処理、また、試験召喚戦争時の補習観察者。戦死者が逃げないように連れて行つたりもする。

過労で倒れないかが心配ですね。

おや？工藤様もなんとか倒したようですね。

では伝令をだしましょう。

「伝令の方、土屋康太、姫路瑞希共に戦死致しました。桜華様と霧島様に報告をよろしくお願ひします。」

桜華様、貴女からの命は果たしました。

ですでの

また、写真を撮つてもいいですかね？

正確にはワイシャツと下着だけを身につけて、涙眼がよろしいかと
……あ、すみません。鼻血が……（ふがふが）

私と裏切りと学年戦争・・・

やあ、みんな。ちょっと頑張つて!! キーの物真似で挨拶してみた
桜華さんだよ。

いやあ、なんだか寒くなつたねえ。知つてる? 私、さつきから背筋
が寒くてたまらないの。それに何故だか体中が小刻みに震えてるみ
たいだし……。

なんだか、咲夜に(限定)なにかさせられそうな予感が……いえ、
それ以前になにか私の黒歴史のよつた物が出回つているよつな……。

…… 気のせい…… よね?

…… ただの考え方…… よね?

- - - 禁則事項ですつ

今そのネタダメヒエヒエッツ――!

それはもうアレだからりつー答え言つてみよつた物だからあつ――!

「島田さん、天月さんが来たよつ……島田さん？」

「…………（相変わらず綺麗よね……女として自信無くしそう。いや、でもそれなら美春……とまではいかないけどそれなりのスキンシップをとつて……そしてあわゆくば……えつ……？そんな……いかなり結婚だなんて…………）」

「…………？…………島田さん、なんでそんなに嬉しそうなの？」

「ぐつ？…………べ、べべべ別に桜華と結婚する妄想をしてたとかそんなんじゃないんだからあつ！」

「ちよつ、ちよつとタンマツ……こきなつラッショつ！？」

……私の田の前で激闘を繰り広げる美波と吉井。いえ、美波の虐殺でしかないわよね。吉井はそれを避けてるけど……マトリックスで。それにしても貴方達人間……よね？はつきり言つて美波のパンチなんか結構速いし、威力も小妖怪程度なら一発で殺せるぐらこあるわよ？

「…………天月部隊、突貫せよつ……！」

にしても、私達がいることを忘れるなんてダメじゃない。部隊を任せている身としては完全に失格ね。

私の命令を受け、私を愛する命とかいう馬鹿げたコモドーネイーの

構成員だと思われる天月部隊の隊員達が言葉の通り突貫しようと走る。

「島田副会長、そこを退いてくださいっ！邪魔をするのであれば天月様を愛する会のNO・2であろうともコレが天月様の命令ならば、貴女を倒さねばなりませんっーー！」

「紫月さん……ダメよ。私はEクラスの副部隊長としてやらなければならぬに責任があるのよーーー！」

ちょっとつづつつづつつづつと待ちなさいっ！－！－！なに？咲夜がNO・NOの創設者で美波がNO・2？

桜華・S・T・天月を愛する会の事実上のN.O.・3になんて美波がいるのよつー?やつぱり一年の最初に色々と手助けしたのが原因つ!

そういうえば原作では見せないけど……かなり女の子らしい表情とかしてたしね。ちょっとだけ納得だわ。あまり、というか全然私を愛する会の方は納得してないけどねっ！

「島田福太郎……へ、いつなつたら私達は貴女を越えていきま
す……。」

「来なさいつー紫月さん達はAクラス……どつせ勝てないだらつけど、副会長の誇りを見せてあげるつーー」

「……島田さん、遠い（ボソッ）」

……。

もつ私に話すことなどはない。

もうなんもあえねえ……

それに聞こえてる？吉井にあんなことを言われてるのよ？入学式日にセーラー服を着てきたあの吉井に……。

ま、いいわ。あの子達なら私の考えた作戦通り動くでしょ？後は任せましょ？

「高橋先生っ！Fクラス、吉井明久が天月さんに総合科田勝負を挑みます。試験召喚っ！—」

……馬鹿なの？馬鹿だったわね。

「……馬鹿ね。私に総合科田で挑むなんて。」

そんなにわかりきつた答えをみたいのかしら？激しく意味が分からないわ。私が学年一位だということはわかりきつてるはずだし、雄

「ことだから私のことも幹部メンバーには話してあるはず。

それなのに仕掛けてくるなんてね。

「試験召喚つ！－！」

私は召喚獣を出す合意言葉を叫ぶと、首から上だけを吉井に向ける。眼は少し鋭くしておぐ。これで、相手がビビッたら簡単に倒せるからね。

私は私に挑んできた吉井に返すより前に召喚獣をだす。

私と吉井の間の廊下の地面の上に魔法陣が現れ、その上にボウツと計七つのそれぞれ色が違つ小さな焰が現れる。それらは引き寄せられるかのように中央に円を描くように集まり、虹色の焰を作り上げた。そして、その焰を切り裂いたかのように七色の焰が縦に割れ、その中から私と同じように首から上だけ向けた格好をした召喚獣が現れた。動物は白虎だろうか？白い猫系の耳と白い虎のような尻尾がついている。犬歯が鋭く、爪もそれなりに長く鋭い。武器は日本の刀がある。防具は上がサラシで、下が黒で青いラインが入った長ズボンだ。また、顔には頬から目の下あたりにかけてちょっとした赤色の刺青がしてある。

一つだけ良いかしら？

格好いいつ！－！

なんでこんなに出現方法が格好いいのつ！－？まさか、私が10億円

ほど学園長に上げたからからそれで氣をよくして……なんてことない
かしら？

だつて他と比べて凄く氣合に入つてるもん。

「『呪縛せし兎と禁忌を犯せし道化師（サージュムーン・クラウ
ンビットエイション』）。【束縛『神のルール』】。」

「えつー？ ちよつ、なにコレつー！？」

『桜華・S・T・天月 総合科目 8679点
VS

吉井明久 総合科目 764点』

『桜華・S・T・天月 総合科目 8579点

吉井明久 総合科目 523点』

うわあ……物凄い点差ね。まあ、今回は私もそれなりに本気でやつ
てみたしね。こうなるのも当たり前かな？

私の腕輪も使つたしね。『呪縛せし兎と禁忌を犯せし道化師（サー・ジュムーン・クラウンビット・ティシヨン』は腕輪を発動させるための鍵よ。私も咲夜も能力が強い分、発動キーを長くして隙を大きくさせるのが学園長の譲歩みたい。私のさつき使つた【束縛『神のルル』】は私のオリジナルスベルカードよ。幾つもの鎖鎌を相手に巻き付くように飛ばし、相手の身動きを取れなくするスベルカード。鎖鎌には魔力、神力、妖力、靈力が使えないように設定されてるから完全拘束だね。

まあ、召喚獣相手には意味がないんだけどね。

「あ、天月さんっ！ 一体どうしてこんなことを……っ！ ？ ま、まさか僕にＳＭプレイをする気なのっ！ ？ 待つてっ！ まだ心の準備が……。」

……馬鹿なのね。やつぱり。その身動きが取れない状態でそんなことを言つなんてね。ま、それもここまでよ。

「じゃ、根本君。周りの子達は潰したから後は煮るなり焼くなり切り刻むなりして楽しんで頂戴。その鎖鎌は持続効果があつて、私がフィールドを離れても消えないわ。攻撃するのは召喚獣だけよ？ フィードバックがあるから充分でしょ？」

「ああ、わかった。まあ、物足りないがな……これよりBクラスはAクラス達に味方する。天月、俺たちはすぐに終わらせて突撃するから先に行つておいてくれ。」

「ええ、待つているわ。高橋先生、この勝負は根本君に受け継ぎます。」

さ、て。私も咲夜と合流してから行くとしましょうか。

Fクラス本部へ……

根本に吉井という名の餌をあげて、さつき意味の分からぬ会を作った張本人である咲夜とその部隊の人達（十六夜部隊も全員が桜華・S・T・天月を愛する会に所属）と合流した桜華・S・T・天月だよ

さつきから熱い視線が私に向かってきて暑い暑い。私の能力で自身に『絶つ程度の能力』を付与したから苦にならないけど。

ま、それはおいといて……さつさと作戦に取り掛かるとしましょうか。

翔子 side)

今、私と優子の部隊はFクラスの前の廊下にいる。

私達は情報戦で一番やっかいな土屋康太と最大戦力の姫路瑞希を十六夜さんが倒したっていう情報を桜華が寄越した伝令の人聞いた

直後、ここへやってきた。

今から始まるのは私の我が儘。

Fクラス側の幹部は後優子の弟だけのはず……他の幹部とFクラスの生徒達、Dクラスも『全て』桜華と十六夜さんの『二人』によつて倒されたはずだ。

桜華と十六夜さんの部隊の人たちは私と優子、愛子、久保の部隊と合流している。でも、桜華の部隊も十六夜さんの部隊も私たちの部隊に入らず、別の部隊を作つていた。その部隊をまとめ上げるのが、桜華・S・T・天月を愛する会のNO・110であり、Aクラスの桜華・S・T・天月を愛する会のそこそこ上のNO・で、成績も私達幹部の次に強い『佐藤 美穂』サトウ ミホだ。彼女こそ、私達Aクラスの最大の空気さんだ……私はなにもいつていない。

Bクラスは桜華の作戦によつて寝返つたから倒す必要もない。簡単に裏切るような人達だから油断はしないけど……。

「…………後は桜華と十六夜さんが来るのを待つだけ。」

「代表、本当に大丈夫なの？副代表は一応頭はいいけど副代表よ？それなのにあの莫大な人数を一人だけでたおすなんてできるのかしら？」

「…………できる。桜華と十六夜さんは力を隠している。優子はあの二人がどうやって今の地位についたのか知つている？」

「知らないわ。普通にテスト時間フルに使つたんじゃないの？」

「…………違つ。あの二人はテスト終了時間10分前に書き始めて今の地位に就いた。」

「「「「えつー?」」」

「「「「「「常識ですつ……今回天月様が30分だけで7000点以上とつた」とも常識ですつ……」」」」」」

「……こつ之間にこつちに耳を傾けていたのだろうか?

「「「「「「天月さまの話を聞き逃すはずがありませんつ……」」」」」」

「ナチュラル一心を読むのもやめてほしい。桜華のことになるとなんでもできるのがすごいけど……なんだか怖いものがある。桜華のストーカーに見えてしまうのはなんでだろう

「「「「「「褒め言葉ですつ……」」」」」」

「……本当に勘弁してほしい。

「ふう……なかなか鬱陶しかったわね。ちょっと点数が減っちゃつたわ。」

「そうですね。私も少しかつてしまつたようです。」

『 Aクラス 桜華・S・T・天月	数学 670点	& A
クラス 十六夜咲夜	数学 543点	
VS		
Dクラス & Fクラス	数学 0点	

流石に少し疲れたわ…… 80人前後を一変に相手するのは……

まるでゴキブリのように湧き出てくるから鬱陶しくなつて『呪縛せし兎と禁忌を犯せし道化師（サージュムーン・クラウンビットイシヨン』で【凍符『ブルースター』】を使ってしまつたわよ。

【凍符『ブルースター』】は私の前と左右を凍気を纏つた弾幕がラ

ンダムで動き回り、時には止まつたりして相手の動きを一度完全に止める技だ。また、この技は私の魔力と妖力を込めてるので殺傷能力も高い。

そして、この技に当たらなかつた相手には咲夜の『ジコラルメント・ファンタジア 時空幻想奇術』で【傷魂』ソウルスカルプチュア】を発動させてさつさと片付ける。

でも、これを抜けてくる奴ももちろんいる。が、掠りはするものの簡単に戦死をする私たちではない。咲夜はグサリと、私はグチャリといった風に切りつけ、刺し続ける。

「咲夜、翔子がお待ちかねみたいだからさつとといくわよ。能力使用を許可するわ。」

「はい、フガフガ 桜華様」

……いつの間に鼻血を出していたのかしら。まあ、いいわ。よかないけどよしとしておきましょう。それが紅魔館の主としての器量の見せどころよ。

こんなところでみせてもしょぼいのだけれど……まあ、気にしない方が吉よね。

「では、行きます。パンチラの準備はよろしく……とにかく行きます！」

「ちよつと待ちなれこつ！何か不吉なことをおつとしなかったかじりつー？」

絶対『パンチラの準備はよれこでしょ』かって言おうとした
でsue(ピタッ

翔子side

「…………終わったみたい。」

「咲夜、あなたに罰を与えるわ……1つ、一週間の間、緊急時以外『ワン』といえない。2つ、私の着替えは口だけで、お風呂は身体全体を使いなさい。3つ、一週間の間、基本は四足歩行よ。いいわね？」

「よ、よれこんで……愚まつました。これも罰です。仕方がありません。」

「…………やつぱつこつなつたか……完全に喜んでるし、昔の咲夜は何処へ……」

なんだか桜華も色々と大変そう。でも、その罰は魅力的だと思う。行く行くは私も雄二に……。……危なかつた。私も十六夜さんのようにトリップしてしまいそうになつた。

それよりも、やつぱり色々と迷惑をかけたこの一人には謝つておかないと……。

「翔子、謝罪なら受け付けないわよ？」

「わん。わんわんわわん。（やうですよ。私達がやりたくてやつたのですから気にしないでください。）」

「…………あり、がとう。」

……本当にこの一人は私の最大の親友。なんでもっと早く会えなかつたんだろう、と後悔してしまつほどにいい人たち。もしかして、こんなにも早く友達に……いや、親友になれた人は初めてかもしれない。雄二は小学生のころは結構皆のことを下に見ている節があつたし、恥ずかしがり屋だからすぐには友達になれなかつた。それは優子達も一緒。皆、友達からすぐに親友になることはできなかつた。

でも、この一人は違う。出会つて三日しか経つてないのに、もはや居て当然かのように思つてしまつ。それがこの一人の不思議なところ。そして、そんなところに私達Aクラスは助けられている節がある。

勉強がほとんどのAクラスの中で十六夜さんと一緒にゆつたりしている一人。まるで、休み時間にも勉強などをしている私達に少し

は休めと言っているか用に休み時間を優雅に過ごす。Aクラスに入つたからには休み時間も勉強をしなければついていけないという思考自体を破壊するかのようにまつたりと過ごす二人ははつきり行ってこのAクラスのなかでは異様な存在だった。けど、その異様さが私達Aクラス一種の癒しを与えてくれた。

代表である私にできないことを簡単にしてしまう一人は本当に脱帽してしまう。

そして、なんの恥じらいもなく『わん』と言い続ける十六夜さんに脱帽してしまう。流石は桜華・S・T・天月を愛する会の創設者なだけはある。

「や、翔子。愛しの坂本君がお待ちよ?」

「……副代表。愛しの、とはどうこうことかしら?」

「そのままの意味よ。ね、翔子。」

「…………うん。」

桜華たちとたわいもない話をしながらFクラスに入る。

そう、この人たちがいるかぎり私に……私たちに負けはない。

「まつたく……副代表と十六夜さん、私達が待つて居る間に何があつたのよ。」

「……私に聞かないで頂戴

「わんわんわんわんわん? (こつもどり)ですがなにか?」

なにがいつもどりなのかしら?の駄犬が……。いや、駄犬って言つても絶対喜ぶのでしょうかね。SM的に考えて。

原作の咲夜は……もういない。否、原作のキャラは誰もいなくなつた。キャラ崩壊的な意味合いで考えて。

ちなみになんで咲夜の言葉が皆に通じて居るかと云うと、スケッチブックになにがいいのかをわざわざ時間を止めて書いて見しているからだ。他の咲夜の能力を知らない人たちはきっと『い、いつ書いたんだ?』といった感じのことを思つて居ることは確定でしょう。

「…………この十六夜さんのプレイに」関して詳しく教えてほしい。私も雄一とやるから。」

「翔子、落ち着きなさい。今ならまだ引き返せるわ。」

「副代表、無理よ。ここままでいったらもう無理なのよ。」

そう
だったのね。

ご愁傷様、雄二。安らかに眠りなさい。貴方はきっと悪霊にでもとりつかれているのよ。私？私は気にしないことにしたわ。だって、どうせついてるとしても私を転生させた神様だらうし。

「優子、ありがとう。」
翔子、それと駄犬。さつさと入るわよ。

「うん。」

「わん！（わかりました）」

「……ああ、そうだったわね。咲夜だもんね。それと、駄犬つて呼んで頬を赤くしないでほしいな。私としてはどういう反応をしたらいいのかわからなくなるから。」

ま、そんなことはおいてさうさと中に入る私。なんてスルースキルなのつ！これでかつるつーーーとか……全然思つてなんかないんだからねつ！！！

いや、ホントに。もう私はどっちに勝ってるから。疲労感的に考え

て。

「……よくもやつてくれたな、桜華。」

「あら？ それは二流の強者が言ひ言葉よ。流石ね、自分で分かつているなんて。」

「……チツーどの口が言ひやがる。俺がプライドをとるとわかつておきながら二んな戦争を提案するとはなあ。」

そうなのだ。私が提案した学年試験戦争といつものは実際は最初から勝ち負けは決まっていたのだ。

そしてそのことに雄一は気付いていた。二二で私は雄一にとっての最大の選択をとえた。『元神童としてのプライド』をとるか『クラス連中に批判を浴びながらも次回を考える』かの一択を。

結局雄一がとったのは『プライド』。

そして雄一がとった選択は翔子にとって最大のチャンスになる。今回ルール、勝った方が負けた方に命令することができる。きっと翔子はこうこうだらう。

『私と付き合つて

と。

原作とは違う。完全に雄一が翔子を避けている理由である過去の産物を知っている状態で。

何故知っているか？それは簡単。私が話したからだ。翔子の知り得ない中学での雄一の様子。二つ名。小学生での例の事件の真相。

それらを知った状態でもきっと翔子は言つのだらう。

『大好き』

と。

ならば私がそれを応援しないわけにはいかない。『親友』として、または『心友』として。そして何より『女』として。

確かに元は違う。だからなんだ。私は私だ。男になろうが女になろうが変わりはしない。そう、変わりはしないのだ。性格は。しかし変わる部分は確かにある。

まずは『体つき』。

そして、『思考』。

または『容姿』。

そして何より『自身の在り方』。

自身の在り方。昔の『俺』ならば恋愛など氣にも止めずに友情などに全力を注いでいたことだらう。それ自体は『私』も変わらない。結局の所、根本にあるのは『友情』なのだから。

しかし、『俺』と『私』は想いが違う。

『俺』は自身の友達が幸せになれば良い。そのためには相手が本当に大丈夫なのかとかはしっかりと考へる。たとえウザいと思われようともそれで友達が幸せになるのなら耐えられる。

でも『私』は両方が幸せになつて欲しい。確かにこの二人は私の友達だ。でも、そんなことは関係ない。勝手にすればいい。そう勝手にすればいいのだ。寸前までは手伝つてあげよう。後は勝手にしたらしい。友達が悩みに悩んで選んだ恋なのだ。例えそれが気紛れの恋だとしても私が口をだしていい問題じゃない。確かに両方が幸せになつて欲しい。だからこそ私は放置をするのだ。無責任で矛盾している? そう言われば私はこう言つだらう。

『だから?』

だからなんなのだ? 寸前までは手伝つてあげただらう? その後を自分達の手でなんとかできなければ今後がうまく行くわけがないだろう? それとも馬鹿みたいに他人に縋つて生きていくのか?

それこそ不幸だ。幸せとはほど遠い。

醜くとも生きていけばいい。苦しい生活だが幸せだからいい。良い言葉だ。それは賛成しよう。だが、それは逃げでしかない。今の自分の状態を省みず良い方向へと目を背けているだけだ。

そんな状態で何が幸せか。これだけ幸せがあつたらしいなどなどといふ奴もいるが、それは謙虚なのか？本心なのか？

私にはただ諦めているようにしか見えない。私は友達にそんな風な『幸せ（不幸）』を送つてほしくない。だから放置するのだ。それが私にできる最大のプレゼントだとと思うから……。

だから、私は下準備をしてしまおつ。

全てはこの一人、『霧島翔子』と『坂本雄一』の最高の幸せの為に。

「雄一、貴方にお願いするわ。翔子と決着を付けなさい。全ての決着を……。」

私の言葉に呆然と立ち尽くす雄一。けど、私は無視する。下準備を終わらすためだ。

「雄一、貴方に問い合わせるわ。貴方に決着を付ける覚悟はあるのかしら？」

「やつはつと、それでいてはつきつと。言葉が脳内に焼き付くようだ。

「雄一、貴方に再度問い合わせるわ。貴方に全てを終わらせる覚悟はあるのかしら？……翔子にはできている。」

誰にも邪魔をさせはしない。この場だけは、この瞬間だけは。私の全力を出してでも……っ！

私は今まで隠していた霸気を出す。教室内を全て包み込み、圧力をかけるような霸気を。

「答えなさい坂本雄一っ！貴様に覚悟があるのかをつ……」

私と決着と学年戦争・・・（後編）（前書き）

ちょっと内容が薄つぺらこよつな気が……

私の霸気に何も言えないのか、それともただ単純に私の質問に答えることができないのかはわからないが、完璧に押し黙る雄一。

そんな雄一に私は無言の圧力を送る。もちろん他の人にはわからないように。何故だか咲夜はすぐに気づいたみたいだけ。

うつすらと汗をかく雄一。まだ雄一は凄い方だ。同じ教室内にいる生徒の半分ほどは膝をついているし、その他の生徒もなんとか堪えているといった感じなのだ。そんな中、雄一はうつすらと汗をかくぐらいにとどめている。私の霸気になれている咲夜は例外だが、普通なら他の生徒と同じ惨状になるのが普通なのだけれど……

「桜華、それは選択権は本当にあるのか？」

「ええ、あるわよ？決着をつけるか馬鹿みたいに……昔みたいに逃げるかの一択だけね。」

『「Jの性悪が……』』と言しながら舌打ちする雄一。

まったく……失礼しちゃうわね。私にそんなこと言つとこわ~いメイドとかが暴走するわよ~。

「上等だ。『決着』、つけてやるひじやねえかっ！」

「…………翔子。」

「…………うん。」

雄一の決意を聞いた私は翔子に前に行くよう促す。それに応えて前に行く翔子。翔子が足を前に動かそうとすると同時に私は霸気をとめる。

もう、ここから先に私は必要ないのだから。

翔子 side

「…………雄一。私は負けるわけにはいかない。代表として…………そして、桜華の親友として…………つ――！」

「…………そ、うか。だ、が、俺にもFクラス代表としての、元神童としての矜持がある。そ、うやすやすと負けるわけにはいかねえ…………。」

各自の心情を露わにしながら舞台はどんどん整つていく。

私は本当に良い親友に出会つたとおもつ。

そんな親友が見ている前で負ける訳にはいかない。……必ず勝つてみせるつ！

「…………高橋教諭、Aクラス代表霧島翔子がFクラス代表の坂本雄一に総合科目勝負を挑みますつ！」

「承認します。」

「「試験召喚つ！-！」」

私と雄一の召喚獣が魔法陣と一緒に姿を現す。雄一はメリケンサックを持ったまるで不良のような容姿をした召喚獣。私は両刃剣を持った騎士のような召喚獣。

私は召喚が成功したと同時に召喚獣を走らせる。これは勝負じゃない。……戦争。仲間たちが作ってきた道のりを私達は通ってきた。私たちの為に作つてもらつた勝利への道筋を閉ざすわけにはいかない。ゆえに卑怯などといつ言葉はどこにも存在しない。

この状況で卑怯などと言おうものなら私はその人とはあまり仲良くなれそうもない。なうつとも思わない。

「…………りあひー。」

でも、雄一はそれが解っていたかのようにカウンターをくらわそくと召喚獣の拳を思いつきり放つ。

しかし、私は雄一の召喚獣の拳についているメリケンサックを滑らせて聞合いに入り込む。そしてそのまま……一閃。

『Aクラス

霧島翔子 総合科目 4520点

VS

Fクラス

坂本雄一 総合科

目 993点

『Aクラス

霧島翔子 総合科目 4460点

VS

Fクラス

坂本雄一 総合科

目 723点

どうやらかすつただけ見たい。でもかすつただけでもあそこまでダ

メージを『える』ことができるならまだ勝つ見込みはある。雄一からのカウンターを受け流したときに両刃剣の金属がちょっと欠けて、それが私の呪喚獣に当たったみたいで少し点数が減つたけど……多分大丈夫。

「翔子、まさか『めえ』……」

「…………うん。」

雄一が何を言いたいのが解るから返事を返す。雄一はその答えを聞いて少し不機嫌そうに私に言い放つてくる。

「あれはお前の勘違いだと黙つてるだろ？」「……」

「…………勘違いなんかじゃない。…………私は桜華に全て聞いた上で雄一に言いたいことがある。」

「つー…………桜華『めえ』なんぞ知つてやがる…………」

「…………」

雄一の言葉に桜華は答えない。それどころかどうからか椅子を持つてきて十六夜さんに足をなめさせている。…………今度アレも教えてもらおう。そんな桜華と十六夜さんの様子を見た優子の弟がぶつぶつと言つてゐるけど…………「…………」からじゃ全然聞こえない。

そんな桜華の様子に諦めたのか、雄一は再度私に向かいあう。

「もういい……これからは勝つた方が官軍だつ……」

うん。

私は元々そのつもりだつたとは言わない方がいいだろう。私たちはお互いの召喚獣を走らせる。私は両刃剣を縦に振りおろす構えで。雄二は喧嘩で慣れた殴る構えで。

振りおりし、お互いの召喚獣が交差する。

『Aクラス
霧島翔子 総合科目 2010点』

エクラス 坂本雄一 総合科

三〇

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！－！－！

私たちの関係と初の戦争に決着がついた瞬間だつた。

私と勝利とお願いと・・・（前書き）

前話が短かつたから少し頑張つて作つてみました。

まあ、此方も短いですが（笑）

私と勝利とお願いと・・・

「…………雄一、私達の勝ち。」

「…………殺せ」

よかつたね雄一。吉井は根本に色々されてるから殴られる」とはな
いよ。

ん?ああ、いつものアレ?して欲しいの?

仕方ないなあ……じゃあ、やるよ?

やつほー、皆のアイドル桜華・Scarlet・Tyrene・天
月だよ

なんだか最近咲夜が面白いことをしだしたよ。なんどぞこれから椅子
を取り出して私の素足をなめだしたんだ。笑えるよねつーあつは
ははは……笑えない。

それを見た優子の弟、秀吉が『ふむ……あれが女王キャラ』というも
のじやるつか?勉強になる。……ワシもレパートリーを増やす為に
やらせてもらえんじやんつか?』とか不穏なことを言っていたのが
印象的だねつ!!

ま、それを見た咲夜が『桜華・S・T・天月を愛する会 NO.4』と書かれたカードを取り出そうとしてた方が印象的だつたけどねつー！

咲夜に私を愛する会は何人ぐらいいるかを駄目もとで聞いてみたら答えてくれたよ！なんていつたと思う？

『幻想郷の住人と文月学園、この街の住人、ネット住人を合わせて10000万人は余裕ですね。』

だつてつー……もう何も言えない。

「…………約束。」

「…………わかつてる。だが、本当に勘違いでもなんでもないんだな？」

「ええ、違うわよ。私の情報網に隙はないわ。」

「…………本当に、意味が解らないな。お前は。」

失礼な。私は異常で例外な幻想を司る吸血鬼なだけよ。それ以外の何物でもないんだからね。

「…………雄二、私と付き合つて。」

おつふ……恋する少女は直球だね。まつたく……FFF団がいたら雄一が異端者審問にかけえられているところだよ？まあ、そんなことは知らないだろ？からこんな人前で言えるんだろ？けどね。

それに、私達△クラスの生徒たちは翔子の事情も知ってるから何も言わないしね。

それにしてもわあ、咲夜と秀吉は何をしているのかしら？

なんだか『今度一緒に桜華様の足を綺麗にしましょ？』『そうじやな。ワシも今から楽しみじゃ。』『い、十六夜さん？わ、私もいかしら？』とか聞こえるんだけど……？え？あれ？優子さん？何をしてらっしゃいますの？なに？もしかして貴女そういうプレイが好きだったとか？そして男子諸君。なんでそんなに『俺もやりてえなあ……』的な目で私を見ているのかな？

私は身体は女だけど、根本は男なんだよ？それなのに男が好きになるはずが……な……？あれ？それって私が完全にレズ娘だってこと？

……！Jからは諦めてそういうプレイを楽しむべきなのかな？『元男として……。

そんな迷つてる私をおいて話は進んでいく。

「……拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

「……仕方がない。俺も男だ。」

雄一はやつてすんなりと翔子の後に続いていく。

まつたく……やつと終わつたわね。

「咲夜。私達も帰るわよ。」

「わん。（了解致しました。）」

久々に幻想郷を回つてみようかしら……ああ、でも怖いわね。神が
言つていた通りとなると大体が若干咲夜が入るつてことだし……。
びひょくかしら。

「あ、天月殿、や、その……」

「あら、木下君? なにか私に用?」

「う、うむ。わ、ワシと遊びに行かぬか?」

「……。」

はつー?」、この私が思考停止したですつてー?」

いや、まあそんなことばずつとなんだけど……主に咲夜のせいですね。

「……だめ、かの？」

「ちよ、涙田 + 上田使いはせこいわよー。これでもやつをレズツ娘だつて気づいたところなんだからつー」

「……いいわ。咲夜、先に帰つてなさい。私は木下君……面倒だから秀吉でいいわね。秀吉と『一人』で出掛けるから。……この意味わかるわよね？」

「……わん。（……畏まりました。会員達にも伝えます。）」

「紫達もよー？」

「……。」

返事はないけど……大丈夫でしょ？。いついた時の私に逆らつたら無視することにしてるから。

私大好きな奴らには最高の威力になるはずよ。ま、私が自覚していられるからできる技だけだね。

「では行きましょ？。Hスコートは任せたわよ？」

「出でるのじゃつー。」

「いつ迷つまかでくれるのか、楽しみね。」

私と秀吉のお出掛けと・・・

やつほー、皆の女王様の桜華様だよ

わあ、跪きなせこつーとか言いたくなるね。

今は秀吉とトーーーしてるので、他から見たら女子同士で遊びに行ってるようなものだけだね。

「秀吉。貴方はどこへ連れて行つてくれるのかしら？」

完全にお嬢様を演じる。制服ながらも気品を溢れだたせ、扇子で口元を隠し上品さを保たせる。間違つても、口で紫みたいて胡散臭くはなりなつよつに注意する。

「そ、そつじやな。映画館にでも行かぬか？」

「映画館?.....なにか見るものあつたかしら?」

「うむ。『紅魔館の主と演劇バカ』とこつものなのじゃが.....」

「.....良こんじやないかしら。」

「口うと笑つて見せるナビ、内心は紫を何十発か殴つてゐるわ。だつてこんなことするの紫ぐらうしかいないんだもの。仕方がないと思うわ。

「で、では行くとするかの。——」

「手……あれてるわよ、執事さん?」

「む……畏まつました、お嬢様。では、お手を此方に……」

「ふふ……宜しく頼むわ。」

いつの間にか主と執事の設定で映画館に「こぐ」とこなつた私達。

楽しそうだからいいかな?

（秀吉 side ）

「お嬢様、映画館が見えてまいりましたよ。」

「あら、もうへ・あまり通らない道のりだったからか、少し早く感じてしまつわね。」

上品な氣を漂わせながらワシの手をとつてくる天月殿。天月殿を見ているとなんだか胸がざきざきしてくる。これはやはり恋なのじやねうか？

しかし、天月殿と恋仲になるとしたらと懲りつと……はつきり言つてゾッとするだい。なんといつたつてあの昨月の人数で89679人を超えた『桜華・S・T・天月を愛する会』を全員説得しなければならんのじやから……。

まったくといつて不可能じやねう。幸いなことに、創造主である十六夜殿には『貴方でしたら、……まだ、いいでしょ』。しかし、まずは執事としてです。貴方の全てをさらけ出し、我々が納得しなければ……貴方は塵と化します。我々の相手をするといつことはそういうことです。それをお忘れな氣よ。……。』と言われたので挑戦する価値はあるはずじや。失敗すれば塵と化すやうじやが……そのようなことに遅れをとつていては恋などできるはずもない。ならばできるだけやってみようではないか。挑戦するかどうかは今できるじとをやって、様子を見てからじやな。

「あら？あれ……翔子と雄二？ セツセツ手錠プレイとは色々と問題な恋人関係ね。」

「セツセツ？ まますね。しかし、あれはあれで『通』な楽しみ方と言えるのではないでしょ？……お嬢様もやられますか？」

そつこいながらワシも手錠を取り出す。……なんだか身体が熱くなつてきただのじや。やつてもらいたいと素直に叫びたいぐらいに衝動がおさまらぬ。そつと今のワシは眼がウルウルとなつていて「じやうひ」。……上田使いもするべきかのう?とある台本に『涙田+上目使いは重要つ!特に意中の異性をときめかせるにはねつ!-! P.S.特に秀吉君。』と書いてあつたからのう。やつてみても大丈夫じゃうひ。演劇は嘘をつかん。騙すのはワシらの仕事じやからの。

「……そつ、ね。一人きりなら考えてあげるわ。」

「ありがたき幸せ。では、チケットはありますのでそつと入ることにいたしましょう。」

「雄一達に会わなくともいいのかしら?」

「はい。今の私は天月殿の執事。私の行動理由は天月殿ただ一人の為にあります。」

「……ふふ、正解よ。今の貴方は私だけの物なのだから……」

独占欲といつか……なんといつのじやうひか。しかし、ワシも天月殿にこじういうことを言われても嫌な気分になぞまつたりはしない。むしろ嬉しい感じじや。

そつか、十六夜殿はこじうことをいつも感じておつたのじやな。なるほど、これは癖になる気持ちよさじや。そのまま天月殿の家の執事になるのもやぶさかではないのう。

「……御意。全ては天月殿の為に。……では参りましょう。そろそろ始まってしまいます。」

「ふふ……そうね。」

雄一、明久。すまぬな。ワシは今、此方の方が大切なのじや。

私と執事とお出掛け・・・（前書き）

更新速度が低くなつた。orz

学校がない日とか終わつてから少し書いたりしてるけどなかなか進まない。これでバイトしたらどうなるんだろう？

笑えるね。否、笑えない（反語）

私と執事との出掛け・・・

- - - 私に不可能はないわ。
- - - 部長……なにを言つてゐるのじゃ。
- - - なにつて……ナニ?
- - - なにをいつておるのかわづぱづじや
- - - まつたく……こんな冗談も通じなことは……世も末だと思わ
ない?
- - - はあ

と、いうわけでね。先に言つておくわ。上は私達じゃないわよ? もちろん紫アレンジの映画に決まつてゐるじゃない。

咲夜はともかく、私はあんな下品なこと言わないと。紫とは一週間口を聞かないことにするわ。

「あ、天月殿。少々刺激的で面白かったのう。」

「ええ、そうね。……それで？」

「そ、それで……とは？（あ、天月殿の不機嫌さが限界突破寸前
なのじやーつーーー）」

「貴方は意図的にこんなものを見せにきたのかと聞いていたのよ。

」

何故私が怒っているのか知りたい？なら、教えてあげる。さつきの
映画、ポルノ系の映画だったのよ。つまり18禁。このチケット
売りの定員は適当だからなにも言わなかつたのでしううね。

「ち、違つぞいっ！これはハ雲殿という方から頂いたもので……」

「そう、わかつたわ。今回は許してあげる。」

「あ、ありがとうなのじやーーー！」

紫え……延期よ。1ヶ月無視するわ。1ヶ月ですまされるのよ？感
謝しない。

さて、なんだか萎えてしまつたポルノ映画も見終わつたし……ある
ことがないわね……やつぱりこことは男性にリードして貰いまじょ
か。

「秀吉くそ、次はビリーハーのかじり?」

「む?・わ?・じ・や の? …… 喫茶店なんかど?・じ・や?」

「喫茶店ね? …… いいわ、行きましょ?。咲夜の紅茶とどれくらいの差があるのかを知るのも一つの経験だわ。」

「な?・ば行くとするかの? …… ほれ」

「ふふ、ありがと?」

私はそういう出された手をとり一緒に歩く。それは一種のレズビアン達と桜華・シ・ト・天月を愛する会の会員達の嫉妬と羨ましいといった視線とが集まるだけの出来事だった。

いや、私は認めない。認めてあげるのですか? …… ぐすん

「それにしても、ど?・に?・く?・も?・りなの?」

「『ラ・ペディス』と?・に?・るな?の?・じ・やが? …… な?・か・な?・か評判な店だと聞いておる。文月学園に?・の店長の娘が通つて?・いるという噂もある店じや。」

「……へえ」

……こ?・です。行きたくあ?・せん? …… とはい?・ない私。だつて

……私、一応原作知識持ってるんだよ？薄れなによつに脳にプロテクターかけて保護してるし。

で、原作知識を持つたうえで言わしてもいいわ。

絶対に行きたくないつ！！

理由？理由はね、美春がいるからよ。美春の大好きなお姉さまは誰だと思う？原作通り、美波よ。ええ、美波もいるわ。うん、『も』ね？あの外少女は私まで好きになつちまいやがつたんのよつ！！まあ、発信器とか盗聴器は流石にとつてもらつてるけどね。咲夜に。だつて、幻想郷の場所がばれたらダメでしょ？そのところはしつかりとしなきや幻想郷が滅亡したら洒落にならないことになるから

……

まあ、あの幻想郷に入り込んだりしたら即死になると思うわ。気にしないけど……元は人間でも今は妖怪よ？『死』に私はあまり興味ないから……身内以外わね。流石に身内が死んだりしたら泣くと思うわ。だつて……好きだし……

も、もちろんここにいる人間も好きよ？でもあくまで他人。少々仲良くなつたからといつて私は涙を流さない。そんな人間はもう見あきたから……この身体には多分魅力チートでもついているのでしょう。だから妖怪であつても人間が近寄つて友達になる。……私はそんな友達の死を何回も見てきた。だから……泣かない。

……ふふ、今から喫茶店に行くのに変な雰囲気になつちゃつたわね。気にしなくていいわ。

「……私、ここに入る気が一気になくなつたのだけれど?」

「心配しなくてよい。あれはこの喫茶店特有のパフォーマンスである『父と娘の修羅場』といつものらしいのじや。……まあ、これはこここの喫茶店のマスターの妻が宣伝していることなんじやがな?」

「……私、少し過保護な親は結構好きだけど……ここまできたら家出するわね。」

「それには同意するぞい。」

久しぶり

みんなの女王様の桜華・S・T・天月だよ

なんだか目の前の喫茶店で親子らしき人達が戦闘……否、戦争してるよ。喫茶店の客達が普通に飲食してて、そのギャップが激しすぎてついていけない……。

多分、わかっている方もいるかもだけど……目の前の喫茶店は私達の行き先のラ・ペティス。その店内では店長らしき男とその娘らしき女子高校生が激しい戦いを繰り広げててる。

おわかり頂けただろうか……店長の娘らしき女子高校生とは『清水ミハル』といつて、私を一年生の頃から追いかけ回してくれる女子高校生だ。

彼女は毎回毎回私の服に発信機と盗聴器をわからぬように仕掛け、私の居場所と会話を完全に把握しようとする……なんというか……行き過ぎた愛。そう、ヤンデレだ。しかもレズ。つまり新種の『レズビアン・ヤンデレラ』なのだ。もはや人外。怖いとしか言いよづがない。

「どうあるのかじりっ。」

「…………じりするも」じりするも「じりまできたな」じりまできたな「じりねばなるま

い。」

「そうね。…………じや、入りましょ」じ。

「つむ。……。」

やつぱりとこつべきか、秀吉も入ることをためらつてゐるみたいだ。当然だと思う。だって、想像してみて?貴方達が評判がいいという噂を聞いてやつてきた店が父と娘の修羅場を間近で見ることになるのよ?しかも、その娘、しかもヤンデレに好意を抱かれているという状況下で中に入つたら巻き込まれるのは当然のこと。

貴方達はこんな状況下で普通に店内に入る勇気はあるかしら?私はないわ。ないけど……逆らえない「うんめいもあるのよ……。」

あの娘には私と美波に対するレーダー的なものが備わっているから、うかつに近づけないのよね。今は修羅場のおかげでまだばれていなみたいだけど……店内に入つたら完ぺきにばれる。

ああ……神よ。なぜ私を見捨てたのですか？ていうか神、テメエ表
でろ。今すぐ滅してやるからッ！さあッ！さあッ！

（遠慮します。ていうか久々に私を呼んだと思つたらいきなりなんですか？病んでるんですか？大丈夫ですか？……男性から女性にしたのに問題があつたのですかね？ふむ……やっぱり私の趣味通りに特定の人に対してだけヤンデレ、クーデレ、ツンデレ、デレデレを使い分ける幼児体系のショタとくあにしておいた方が良かつたですかね？）

(やめひつ！？それだけひつ！…それだけはやめてくださいよか！…今まで十分ですつ！…！…注意喚起ですみませんでしたつ！…！…)

（転生させた神に勝てると思った時点で貴女はGAME OVERだったのです。馬鹿め。）

……」の毒舌馬鹿神が……無性にこりつべー

でもこれ以上逆らつたら能力とかなくされる恐れがあるし……ああ、誰かこのイラッキを発散させてくれないかしら……っ――！

「近づかないでください」この豚野郎がつ！死になさいつ！今すぐこつ！！！」

「ならば一緒にお風呂に入りつつーでもまあまあつーー。」

「キモイですっ！私が一緒に入るのはお姉さま達だけですっ！」

なに……これ……つー?—」まで嫌悪感を抱いた生物はあの店長が始めてよ。会話にすら成り立っていない。しかも、自分の娘に對してセクハラ行為。キモイ……キモすぎる。でも、あの店長の様子が私達の周りに男がいたときの反応に似すぎて……どう反応したらしいかわからない!!

とにかくこれだけ断言するわ。

キモイ。

うん。キモイ。皆が知っている中で一番嫌悪感を抱く生物で有名な某Gさんみなキモイ。はつきりいつて近づきたくない。

「木下君、帰るわよ。」

「…………「つむ。流石に元気はこやなのじや。」

「木下君、貴方は「うちの執事をするつて聞いたのだけど?」

「「つむ。十六夜殿にOKをもらつたのじや。」

「…………ならいいわ。そろそろあの子も気づく頃だし…………」「…………つー? この気配はお姉さまつー?」
さつそく氣付いたわ
ね。『能力発動。選択。空間移動。同時選択。完成』。今、Level 1.6(絶対能力者)級の空間移動を見してあげるわ。」

「? なにをいつて シュン 」

今、私達がいるのは幻想郷に行くための隠れ家である商店街の路地裏にいる。そこには咲夜が紅茶を飲みながらくつろいでいた。

「お帰りなさいませ桜華様。……おや、木下様もつれてこられたのですか?」

「ええ、貴方がOKしたのでしょ? ならば大丈夫と考えて能力も使つてきたわ。」

「そうでしたか。幻想郷に危機をもたらすようなことをした場合は私が責任を持つて始末致しますので……」

「当然よ。貴女にはそれをする義務がある。我々の唯一の楽園を

壊さないためのね。」

「……はい。」

「木下君……いいえ、違うわね。」

私は言おうとした言葉を切る。何故なら今から話すのにこの口調……つまり『桜華・S・T・天月』としての私ではなく、『幻想郷のバランスを担う内の一人』であり、『紅魔館の主』である私が一番適切だと感じたからだ。

なので紅魔館の主として、霸氣・鬪氣・銳氣を出して、高慢を・気品・厳格さなどを出しながら宣言する。

「……木下秀吉。貴殿にはまず、死んで貰う。」

「……どうこう」とじや？」

意外と冷静な秀吉にビックリ仰天している紅魔館の主こと私、桜華様は商店街の路地の先に隠してある隠れ家で秀吉に死んで貰うことになりました（キリッ）

あ、もちろん死んで貰うといつてもアレだよ、物理的に死んで貰うわけじゃないよ？

秀吉には現世……つまり幻想郷からいつと外界の常識を持っている秀吉に死んで貰うってこと。

「私が言わないとわからないのか？」

「……わかるぬ。」

「その表情にその言動を発するまでに至つた間……なんとなくわかつているのではないのか？ただわかりたくないと思つてはいるだけではないのか？正直に言つがよい。……なに、殺したりはせぬ。私は紅魔館の主であり、パワーバランスを担う者の一人なのだ。懐は大きいつもりだ。……少なくともそちらのパワーバランスを担う者達よりはな。」

「……わからぬ。ただ、ワシが死ぬとこり」と別の意味があることはわかったのじや。」

「……ほりへならば説明してやるが。……咲夜。」

「はい。」

そうこうつて私の右後ろにいた咲夜が右前へとである。

え？私が説明しないのかつて？

するわけないじやない。だつて……面倒だもの。

……ちよつと？今さつき寝てばかりで式に仕事を任せつけなしの某隙間妖怪（覗き妖怪）みたいとか言つた奴出てきなさい。

今すぐ、私の椅子にしてあげるから。

感謝しなさいよ。私の椅子に成りたいつていう奴なら何人もいるんだから……美鈴とか魔理紗とか紫とか（ボソッ

あれ？なんでパワー・バランスが私の椅子になりたがってるんだろう？しかも魔理紗って……（ブツブツ

「改めて自己紹介させて頂きます。私の名前は十六夜咲夜。桜華様専属メイドをさせて頂いております。以後、よろしく致します。」

片手を胸に当て、ながら執事のよつに秀吉に頭を垂れる咲夜。

「う、うむ。」

「恐れながら私めが説明致します。木下秀吉様、微妙に感づいていらっしゃるようですが……それは間違いです。桜華様が貴方様に言つたことの真意は貴方様が言葉の通りなのです。貴方様に死んで貰う。つまり、貴方様の外界での常識……つまり貴方様が住んでいらっしゃるこの現世での常識と共に今の貴方様には死んで貰うとい

「ヒーヒーとです。」

「ヒーヒーとなのじゅつーーー？」

まあ、普通はそうなるよね。普通に死ねと言つてるんだし
咲夜もアレだよね。微妙に性格悪いよね。本格的な説明をヒント程度にしか与えないんだから……

それで執事としての技量を計つてゐるなら秀吉は微妙つてことになる
けど……あれはあれでプロとしてのプライドがあるからね。技量を
計るなら計るでその採点は厳しい。咲夜はメイドとしての完成系と
いつてもいいぐらいの技量を持つてゐる。いふなればメイドのプロ
といふものだ。

「ヒーヒーまで言つても氣づきませんか……ならばまづきつと聞こま
しょひ。貴方様には人間を辞めてもらいます。」

「……は？」

そりやあそつなるわね。だつて秀吉は私達が普通じゃないとは知ら
ないんだし。まあ、あの文月学園に通つてゐる生徒の大多数はふつ
うじやないんだけれども……。

「簡潔に述べましょひ。私は時を操る人間であり、桜華様は幻想
を司る吸血鬼です。そして紅魔館がある場所、幻想郷は私達のよう

な『化物』と『人間』が共存する最後の楽園なのです。貴方は人間ですでの、そのまま人間として人里で暮らしてもいいのですが……貴方様は紅魔館の……桜華様の執事になることを前提とし、私たちについてきました。この時点で貴方様には『人間のままでいることは不可能』なのです。紅魔館は夜の王が住む館。その場所で生きていくとなると人間では耐えきれずに『玩具として生きていく』か『食糧として』夜の王である桜華様達に尽くすことしかできません。

「……。」

「もちろん貴方様にはこの一件を拒否するという選択もございます。今なら貴方様の記憶を消し、元の生活に戻すことも可能です。しかし、これ以上貴方様が私たちの楽園に近づき、この場所を表にするというのなら……私が貴方様をこの世から葬り去ることになります。」

「……。」

無言を貫く秀吉。普通ならば断る。何故ならば彼には大切な日常が存在するからだ、文月での友人達とバカをやつて楽しむ日常、そして家の姉やその他の家族との日常。今までの彼は楽しい生活を送っていたはずだ。少なくとも私より……いえ、『私達』よりは。

私は唇を開く。彼には酷なことがも知れないが考えさせる時間はない。私達がこれ以上話して口を滑らしたりでもしたら彼には唯一の楽園を守るために問答無用で犠牲になつてもうつことになるのだから。

「……聞ねつ。貴殿に……我らが樂園にて生きてこへ覺悟はあるか？」

「……」

私の問いに少し歎を嘆む秀吉。私はそんな秀吉を無視し、言葉を続ける。

「貴殿に覺悟があるとこつのはう……その覺悟、我らに魅せてみよつー。」

「……わ、ワシシカ……」

「わ、ワシは……それでも天月殿について行きたいのじゃつー。」

「……では、違う問い合わせにも答えて貰う。貴殿の家族はどうする？私の執事をするということは住み込むか、貴殿の家族を幻想入りさせ、人里に住ませる必要がある。なんだつたら紅魔館で全員雇つてもいい。」

「そ、それは……ワシには決められぬのじや」

前回、秀吉に早く決めるよ似非爺。こつちはぐたびれてるだよオラアとか言って（言ってない）秀吉を苛めていた（苛めてない）
桜華様だよ

なに？私がいつ記憶を捏造したっていつの？

え？いま？なにいつてるの？バカなの？死ぬの？

あ、待つて

帰らないで

私が悪かつたからあつ！

あ、いめん。ちょっとキャラが崩壊しちゃつたね

え？ キモイ？ そりゃ あどつもすみませんつした（・・・・・）キリッ

ちょつ、嘘だからつ！ 嘘だから帰るつとしないでつー？

「……ふ、ふふ、フハハハハハハハハハツ！……いや、すまぬな。私は貴殿を試していったのだよ。我が里、幻想郷は全てを受け入れる秘境の地。」

「な、なんじゃ……騙したのかの？」

「いいや？ 大体は本当のことだ。幻想郷に常識は通用しない。それに私、桜華・S・T・天月は人間ではない。種族的には吸血鬼といつたモノ達の一人だ。私の妹たちもな。私の一番下の妹は破壊を司り、一番目の妹は運命を司る。そして私はその中でも異質の吸血鬼。幻想……つまり全てを司る吸血鬼だ。」

流石の秀吉も呆然とするしかないようですが（・・・・・）キリッ

「木下秀吉。貴殿は一度自身の家に帰るがよい。そして私に仕えるかを選択してくるといい。もちろん貴殿の家族の許可もとるものぞ？……そうだな、期間は一週間程度だ。それ以内に私に話しかけてこい。されば答えを聞こいつ。そして来なかつた場合は……記憶を消すだけだ」

まあ、そういうことだ。

私ははつきりいつてしまつと他人が嫌いだ。

ナルシスト？

少し違う。私は『嘘をつき、平氣で他人を貶める奴』、『自身が良かつたら周りなどどうでもいい』などといった思考や思想を持つてゐる奴が嫌いなのだ。秀吉は演劇というモノの中で嘘をつき貶めることを生業としている。

仕方ないと一言で終わらしてしまつと簡単だろ？。

でも私はどうしてもそういつた奴らを許せない。なんせ私が吸血鬼になつた理由も『そういつた』奴らのせいなのだから。

だから私はFクラス入りを拒否した。基本転生者などといった奴らはFクラスに入り、私の嫌いなことを平然とやつてしまつ。Fクラス代表坂本雄一もその一人だが、私は彼のことはまだ好きな方だ。彼は嘘をついても根に持たず、一緒にバカをしあえる仲間に對して嘘……いや、虚言を言つ。一種の本当の友愛を創るために。

彼は無意識にやつているのだろう。小学校で神童といわれ、中学からは一匹狼を氣取りながら他者との喧嘩に明け暮れる日々。あるいはそういうた日から脱する為に利用していることも考えられるが……私は彼のことは去年ずっと一緒にだったので否定することができない。

それに対しても秀吉はまだなにも知らない……いわば他人だ。そうやすやすと信用、信頼することはできない。

だから私は彼を試す。

彼を知るために。

私と学園祭と△クラス・・・(前書き)

遅れました。rzn

言い訳を申しますと：修学旅行と準備に手間取り、書く時間も他人の作品も見る暇がありませんでした！（・・・・）キリッ

え？ 私用じゃないかつて（・・・）？

そうですね。『めんなさい』（――）m

桜が舞い散り初め、学園には新たな季節がやつてきた。

そう。文化祭だ。いや、この学園風に言つと『清涼祭』だ。

そんな清涼祭が目前に迫つたいつも通りのある日のこと。私はいつものように咲夜に紅茶を入れさせ、優雅にティータイムを楽しんでいた。

「ちよつと、副代表つー紅茶なんか飲んでないでこいつ手伝つてよつー！」

「優子。なんかとはなにかしら？今すぐに全国の紅茶と紅茶好き、紅茶を作つてる人とかの紅茶に関わる人達全員に謝りなさい。」

「なんでよつー？ていうか嫌よつー！」

「あ、土下座でね。咲夜、紅茶のお代わりをお願い。」

「かしこまりました。」

「なんで土下座なのつー？それに十六夜さんも普通にスルーしないでくれないかしらつー？？？って代表もなに寬いでるのよつー！」

「！」

「…………紅茶は文化。」

「意味分からぬからつー…そんなドヤ顔されても反省に困るだけだからつー…」

「「「優子（木下様）、「ひめこ」（やす）。カルシウムがたりでないの（ではないですか？）」「」「」」

「なんなのそのシンク口率はつー？で、いつか十六夜さんはなんで私の前にヒジキを置くの？ー？」

「ヒジキにはカルシウムがたつぱり入つておりますので……いえ。気にしないで下さい。これはほんのお礼ですので。……嘘ですが（ボソッ）」

「あれ？十六夜さん？今なんて言つたの？聞き取れなかつたわ。」

「黙れ」のB「破廉恥痴女が。」

「なんだか罵倒されたつー？じゃなくて、誰がB「破廉恥痴女よつー！」

「あなたですがなにか？」「

「違うわよつー。」

「「「優子（木下様）、「ひめこ」（やす）。少しは落ち着たら？（どうですか？）」「」「」」

「「「黙れ同性愛者」」」

「誰のせいだと……『同性愛を馬鹿にしないでくれるか』?」「思つてゐるの?」

「久保君、あなたはとにかく吉井君に告白して来なさい。利達は、同性愛を語るのはそれからよ。」

「む。……実行に移さないのに語るのは可笑しい……か。その通りだ。すまない、少し熱くなってしまったようだ。」

「み、味方が減っていく。」

……大丈夫。Dクラスの玉野美紀と清水美春なら味方のはず。

「……翔子。やめなさい。あの子は話題を出したら飛んでくるから。言葉には力があるのよ? 一般的には言靈と言つらしきけど……言靈は強力なのよ。滅多に口にしない方が身の為よ。」

「副代表……さつきから私、あなたに色々言われてたんだけど……」

■ ■ ■

「（……）氣のせい（ぬへどす）。」

「……されはイジメだわ……やつよ。イジメよ。学園版に直訴してやるわ……。」

「さて……と。咲夜、翔子。優子も精神が崩壊しそうだし……そろそろ手伝ひわよ?」

「…………わかつた」

「かし」まりました。」

「…………なんでそんな嫌々してあげますよみたいな顔するのかがわからない……。」

「やあ、みんな
優子を虐め……いじるのに時間をかけちゃって挨拶が遅くなつた
わね。」

今は清涼祭の季節。

原作では姫路がなんたらかんたら言つてたけど……それよりもAクラスにまでFクラスの事情を持ち込むのは勘弁だわ。やっぱりFクラスはドラブルメーカーよね。面倒な……。

別に友達とかなら普通に助けるけど別段好きでも嫌いでもない奴の為に自分を犠牲にする必要なんかないしね。個人論だけど。これをFクラスに聞かしたらなにかいわれそう……馬鹿だし平和そうな雰囲気をふんふんとまき散らしてくるからね。私や咲夜とは違つて闇の部分とかなさそうだし。

秀吉とかは闇がありそうな感じかな?男らしく見せようとしているのは間違われるからだけじゃないと思うんだよね。まあ、現時点では感でしかないんだけどね。そのうち許可とつて首を少し覗かせて貰

うとしよう。私の執事になるのだつたらだけ……もしものときは主人命令とか使ってでもね。そのかわりといつたらなんだけ私の昔を教えてあげるのもいいかもしないわ。

なんといつたつて家族だもの。せめて仮に裏切られても家族にだけは優しくしてあげたいし知つていて。なんにも知らなかつたら他人と変わらないし……私が嘘をつかれても、裏切られてるとわかりきついていてもこれだけは言うと思う。

『私は貴方の主人になり、愛するわ。貴方は家族になりなさい。嘘をついても、裏切つてもいい。契約を破棄するには私を一回でもいい……殺しなさい。』

それでも私が、注意しないといけないことはする。常識などもはや常識ではない幻想郷でもそれぐらいの思いは持つていて。これは私の完全な本心。

貴、咲夜と美鈴に言われた言葉が頭から離れたことなど一度もない。

「桜華様は私に愛を下さりました。殺人を犯し、追われ、操り人形かのようにただただ無心に人を殺し、軽蔑の意を向けることが当たり前なこんな私に。家族の愛を下さりました。私に家族は居ませんでしたがこれだけはつきりしたことです。何があるうと、私は桜華様について行きます。私は桜華様だけの私でありたいのです。」

「桜華様には吸血鬼としての弱点が全くなく、負けることなどあ

りえないほどの強さです。しかし、私にはそれを抜きにしても貴女についていく理由があります。それは愛です。私達妖怪は基本孤独な存在。この幻想郷の理性がある妖怪達や鬼などは例外的ですね。群を組む妖怪もいますがそれは基本的に弱小妖怪や同族だけです。私は一人一種妖怪。しかも気を使い妖怪や人間達と仲良くなろうとする少々異質な一人一種妖怪です。だからこそ孤独だった。そんな私に家族を与えてくれました私にとってそれだけで一生についていくに値するんです。あ、もちろん誰でもよかつたとかじやありませんよ？桜華様だからです。」

「ああ、ヤバい。思いだしたら泣きそうになつてきた。私はいい家族を持つたわね。」

私と清涼祭と△クラス・・・(前書き)

すみません m (— —) m

久しぶりの投稿のクセにめりやくめりや短いです (^_ ^ ;)

しかも切り方が.....とにかくすみません m (— —) m m (— —) m

私と清涼祭と△クラス・・・

「桜華・S・T・天月。あんた、私に協力する気はないか」

「嫌よ。寝言は寝て言いなさい。だから貴女は妖怪なのよ。」

「……駒駿大会があるだろ？？」

「話べりこ聞きなきなこと性悪妖怪ババア」

「……実はね。あれの優勝者とドッキリで闘つて欲しいんだよ。」

「誰がやるつて言つたのかしら？馬鹿なの？死ぬの？といふか死になさい。今すぐに。……なに一人じや死ねないの？そんなんだから貴女は藤堂力ヲルなのよ。」

「……もちろん報酬は上げるさね。あんたが望むことを一つなんでもしようじやないか。……じつだい？」

「嫌だつて言つてるでしょ？なに？それでスルーできてるとも思つてゐるのかしら？しかも報酬が一つ？舐めてるのかしら？私がたつた一つ程度で動くと思つてゐる時点で貴女の脳は戦国時代なのよ。」

やあ

学園長に呼ばれたと思つたら意味分からなうことと言わされたので苛

ついて口が滑っちゃった桜華様だよ

仕方ないよね。

……だつて報酬が一つだけなのよ？舐めてるとしか言こようがないわ。この紅魔館の主である私を動かそつと言つのならもつと付け加えなさいよ戦国大名がつ！

あら？また口が勝手に……。まったく……駄目ね。私の口は本当のことしかいわないみたいだから。「

「……もはや知つてだろ？……」

「なんのことかわからぬわね。妄想の中で被害者面してもらつても困るわ。……で？報酬の一つは『能力の追加』として、後いくつ報酬を出してくれるのかしら？後、言つておくけど咲夜に頼むつていうのは無理よ？私からの命令がないと動かないから。……優秀なメイドね。ほれぼれするわ。」

本当に……私には勿体無いぐらい優秀なメイドよ。私が能力でいくらでも性能の良いメイド人形を作れるのに作らないのは私の近くにいつも咲夜が居てくれるからでしょうね。

紅魔館からすると咲夜は女房役かな？私は大黒柱？ふふ… そういうのも家族つて感じがしていいわね。

なんだか気分が良くなってきた。まあ、気分も良くなつたしこれで受けてあげましょう。なんていつたつて私、優しいもの

私とメイドと壁つぶし・・・(前書き)

約一ヶ月ぶり?

泣ける遅れ……しかし書く時間ナッシング(ー・)

本当にすみません(ー・)

私とメイドと戯つぶし・・・

優しい私は結局、報酬を一つ貰つ代わりに試験召喚大会の決勝戦で勝つた方が優勝で手には入る商品をもらい、腕輪の能力を客達に見せびらかした後に戦うらしい。

entertainment。つまり余興つてことね。

戦闘科目は総合科目。さらに私にはハンデとして試合開始時に召喚獣を立たせている場所の半径5cm。直径でいうと10cm程度しか移動してはいけないらしい。さらにさらに能力を使用する事も許可されていないという……。【冗談じゃないわね。】

相手が翔子達だったら勝つことが不可能だわ。

まあ、私も私個人としてのプライドがあるから簡単には負けてあげる気はないけどね。

それにも

「今回の清涼祭は大変になりそうね。」

教頭室の扉の横に身体を預けていた私はそのまま上を仰ぎ見る。ま

るで天井の先に広がる大空を見つめているかのような眼差しで。

今年の清涼祭にはレミコアやフラン達も来るつていうのに……ね。

（咲夜 side ）

お久しぶりでござります。

私、十六夜咲夜は桜華様より一時的な休暇を言い渡された所でござります。

それでもこの格好は止めるつもりはありませんが……だって、この格好は桜華様にお仕えしている証。楽しみも悲しみも嬉しさも残念さも……全てを供にしてきたモノ。もはや私の身体の一部と言つてもよろしくござりですから。

とにかく私は絶賛暇つぶし探し中なので御座います。

「それにしても……Fクラスは相も変わらず馬鹿ですね。」

教諭の方々が言つにはFクラスだけが清涼祭の企画が決定してない
いそです。……なのに……はあ……。

何故野球？桜華様によると確かFクラス代表の坂本雄一は興味がないことにほとりと興味がないらしいですし、それが原因なのでし
ょうか？

「そこの所、どうなんですか？」

「……まあ、なんだ？お前はなんだ」「元気だるー？」

しかし、何故私は審判をしているのでしょうか？まあ、坂本雄一の事を聞く良いチャンスですし……よしとしますか。

彼は私に返事を返しながらもピッチャーの吉井明久に指示を送る。残念ながらこちらからは見えないのでどんな指示を出したかはわからぬのですけれど。

「私は大体清涼祭の準備が終わり、桜華様に少しのお暇を貰いましたので……。それで、どうなんですか？」

「まあ、なんだ……本当？……」「霧島様のことが好きなので
すか？」「……ちげえだらつー？最初の質問と全く違うぞつー？」

「……ふう……全く坂本様も運の良い。せつかくこの録音機に録
音して霧島様に届けてあげようと思っていたのですが……」

「ええつー？このメイドなんて恐ろしい事を平然とやりやがる

んだつ！？』

ふむ。これは良い暇つぶしになりそうですね。

そこには黒い笑みを浮かべているメイドがいたとか……

私と清涼祭と幻想郷・・・（前書き）

この小説はじめましての第三者視点を入れてみました
初めてなので不出来かもですが・・・（-.-）

私と清涼祭と幻想郷・・・

さあ、始めようか……貴様の魂のストックは充分か？

私は意外と足りていない。

何故なら

今日が

かの

有名な

文月学園の

清涼祭だからだつ！！

このように心の中で発言をしてしまった桜華はきっとこのときもキツツとしていたことだらう。

きたよ。きちやつたよ。きやがつたよ。の三段活用でお送りする桜華の精神的疲労を溜めまくるであろう清涼祭がつ！

今回は紅魔館に桜華の防御用スペルカードを作るときに元にした実践向きの結界を張つてきたから紅魔館組全員は学校に来ている。桜華の家がそれなりに裕福だということはメイドである咲夜がいつも隣にいることからわかつているだろうからきっと驚かれたりはしないだろう。

因みに防御用スペルカードの名前は【幻符『死之神屑・シノカミクズ・』】。まずは敷地を全て囲う程の巨大な結界を五重にしてかけて、周りを妖力で創られた見えない糸により罠を仕掛ける。この時に妖力を使つているとバレないようには感覚を鈍らす幻が結界を中心と展開されている。そして、その見えない糸に触れた場合そこに向かって四方八方から神力で創られた、もはや神槍の類になる槍がかなりの速度で射出される。あくまで『かなり』だ。幻により感覚が鈍つっているのでそれでも避けるのは至難の技だが、大妖怪レベルまでいくと避けることも可能だ。しかし、幻想郷の桜華の知り合いがそのレベルまで達している者ばかりではないことも事実。そこで、桜華の知り合いにだけわかるように能力でした靈力で『只今外出中。入るべからず。』の文字をいたるところに書きまくり、入らせないように工夫したりとしているので問題はない。

そんなこんなで紅魔館はもはや要塞のような装備で守られているので心配は皆無。

問題の紅魔館組は今現在、Aクラスの桜華の周りにパイプイスを置き、座つている。桜華と咲夜が学園長や教頭、先生を説得して回った結果がコレだ。桜華は優等生。気配りができる出来た子。裕福な

家庭だが他人を下に見ない良い子などといつも高評価をいつも受けているので意外と簡単に許可が取れた。

学園長は……まあ、いつも通りなのだが。

因みに言つと学園長は桜華が妖怪だということや、幻想郷の事などは全く知らない。ただ、天才で頭が周り、不思議な力を少し使える程度の認識だつたりする。

「にしても凄い可愛いわね、天月さんの妹さんたち。」

「でしょう?私の自慢の妹たちよ。」

フランとレミリアを微笑ましそうに見ながら言つ愛子に桜華は自慢気に笑い、一人の頭を愛おしそうに撫でる。そんな桜華に撫でられている二人は幸せそうな表情で足を振り子のように前後に振つたり、幸せそうにしながらも必死に威儀を保とうとしながらもやはり微笑んでしまつていたりと、とても可愛いと言う言葉がピッタシな行動ををしている。

事実、そんな二人を見てAクラスの女子や男子は「可愛い」や「俺にもあんな妹がいたらもっと頑張れるのになあ……」などとつた声が聞こえてくる程だ。

「へえ、そんな話もあるんだ。」

「ええ。他にもギリシャ神話には全知全能の神とされるゼウスが娘のアテネを……」

そんな中優子とパチュリーは色々と本に関する話題で盛り上がりしている。本が好きという共通点からか、もう友達と言つて良いほどの快活とした話だった。近くでは小悪魔も話に耳を傾けており、時々知つている所を補足したり紅茶を淹れたりと楽しそうにしている。

「…………紅はいつもなにをしてるの？」

「門番ですよ。休憩時は花の手入れや鍛錬ですかね。」

「…………凄い。でも休む時に休まないと体壊す。」

「大丈夫ですよ…………といいたい所ですが、ありがとうございますね」

「…………うん。」

美鈴は翔子と日常に関する会話をしていた。翔子は美鈴が妖怪だということを知らないので大丈夫といった所で心配するだけだろう。だから美鈴は気をつけると返した。実際つらい仕事だということは翔子もわかっているということが話す感じで分かったのだろう。そこは流石というべきだろう。流石武闘家。流石氣使い。武闘家だから、氣使いだからといつてできるわけもないが、気にしないことにした。美鈴も長年生きた妖怪。わかるものはわかるのだろう。きっとそうに違いない。

何故なら中国だから！

パクリとか凄い中国だから！凄いです。パクリ率……

「桜華様、隙間は誰を連れてくるつもりなのでしょうか……」

「さあ……ね。パワー・バランスとか結界のことを含めて考えても後数人つて所じやないかしら？考えられるのは紫、文、魔理沙、妹紅ね。慧音は人里、靈夢と藍は結界、幽香は花達を守らないといけないし、輝夜は二ート。個人的に来て欲しくないのは妖精達とその仲間達、幽々子、鬼達ね。理由は簡単、清涼祭が潰れる。私が精神的疲労で死ぬ。」

「来たら殺しましょう。」

「……そうしてちょうだい。」

紫が来るであるつことは確定している事で咲夜は未だに妹たちを撫で続けている桜華に誰が来るかを聞いてみる。心中では『これが……ナデポ。私にはしてくれないのでしょうか……。ああ、想像しただけでもう……』とか思いながらも、桜華も『なんで頬が朱くなつてるのつ！？』とか思いながらも自身の予想する幻想郷の住人を上げていく。ついでに来て欲しくない人々も。そんな桜華の言葉を聞いた咲夜は真剣な表情をしながらも眼には殺意を抱きながら言葉を返す。どうでも良くなつたのか、それともあのメンバーならば別に大丈夫だと感じたのかは不明だが了承する桜華。その口元はひくついていた。

過保護過ぎワロタ。

うん、私が精神的疲労で死ぬって言った後、即答しやがったよこのメイド。

来たら殺しましょう。

殺氣で咲夜の周りに少し隙ができるるぐらいだから。まあ、いつも一緒にいるメンバーは普段通りに話し合ってるけどね。心臓に毛が生えているんじゃないかなって思うほどこいつも通り。逆に怖いよ。

「愛子、後何分ぐらいで清涼祭開始なの？」

「うんと……後、10分だね。どうしたの？」

「少しFクラスに用があつてね。いえ、Fクラスとこより雄二に、ね。」

そういういつつ私はフランとレミリアを撫でている手を休ませ、席を立つ。撫でている手をどけた瞬間に一人が悲しそうな顔と声を出したときは抱きしめてあげようか迷つたが、なんとか理性をフルスロットルさせて耐えた。よくやつた私。

それに伴つて紅魔館組、つまり、咲夜、美鈴、フラン、レミリア、パチュリー、小悪魔が一緒についてこようど席を立つ。

「…………私も行く。」

「私も

「私も行くわ。」

Aクラスの主要メンバーがなにを言つてゐるのよ。しかも内のメンバー全員でいつたらFクラス男子が凄い勢いで近づいてくるでしょうに。

「駄目よ。貴女達も着いてきたらAクラスが起動しないじゃない。特に翔子、貴女が私に着いてきたらAクラスの準備が回らなくなるでしょ?すぐに帰つてくるから待つていてちょうどだい。私と貴女達は……まあ、いても邪魔なだけかしらね……着いてきても大丈夫でしょ?。」

「…………桜華、ずるい。」

「邪魔つて……事実ですけど……」

「翔子、ちょっとだけだから我慢して頂戴。優子達も我慢してくれてるんだから。後、美鈴。口答えするなら減給ね。」

「ええっ！？」

まあ、Fクラスの外に雄一を連れてきたら大丈夫でしょう。ムツツリーニは咲夜に任せたら大丈夫だしね。

まあ、とにかく行きますかあ

私と清涼祭とFクラス・・・（前書き）

連続投稿…ということになるのでしょうか？短いですが、話しがいいのでここまでにしました。

私と清涼祭とFクラス・・・

やあ、結局紅魔館組と一緒にFクラスに行くことになつた桜華ちゃん
まだよん

流石にこのメンバーは異彩を放つてゐるからか、廊下にいる生徒か
らの視線が物凄く突き刺さつてくれる。

「それじゃあ、少しここで待つていて頂戴。呼んでくるから。」

「いえ、桜華様がここにいて下わー。私が呼んできますので。」

「えう? なうようじへお願ひするわ。」

Fクラスについたから私が呼びにいこうとすると咲夜が呼びにいく
と言つてきた。

これぐらい別にいいのに……。まあ、頼むことにしたけど。だつて
面倒じゃない? それをかつて出してくれるんだから儲かりモノと思つ
て任せた方が得策じやないかしら?

「お待たせ致しました。」

「俺に用つてなんだ? もうすぐ開店なんだ。早くしてくれ。」

そういうしていると咲夜が雄一を連れてきた。というか雄一、このメンバーの前でそういう言葉遣いは危ないわよ？今にも殺さんと紅魔館組、私の家族が殺氣を纏つてるからね。私が手で抑えなかつたら貴方即死よ？

「まあ、そう急がすならコレは必要ないのかしら。貴方に必要な情報をそれなりに集めてあげたのに……」

そう言いながら私は正方形に折り畳んだB5の紙を指で挟みながら挑発的に笑みを浮かべてみせる。雄一はそんな私を怪訝に見ながらもその内容を推し量つているかのよにも見える。ああ見えてめ元振神童だから頭の回転は物凄く速い。きっと雄一はこの紙を手にとるでしょう。

「…………対価は？」

ほら乗ってきた。賢い選択ができる人物でよかつたわ。まあ、そういう人物だと知つていて情報を出したのだけれど。

「この情報に見合う程度の報酬。それか見合つ程度の貸しでいいわ。」

「のつた。」

悪徳な笑みでそういう雄一。良い笑みだわ。

「」の情報を教えて良いのは秀吉と土屋君ね。後は頬やらなんやらに出るからお勧めしないわ。」

「ああ、分かってこる。後日、報酬について話しえりとしよう。」

「ええ。旨、帰るわよ。そろそろ開始の時間だしね。」

番外、清涼祭。その頃の彼女は（1）（前書き）

今回は要望もあって番外です。相も変わりずキャラ崩壊はしていますが…（苦笑）

では今回は彼女です。

番外、清涼祭。その頃の彼女は（一）

「 side?? 」

退屈。

彼女がいない。たつたそれだけのことなのに……たつたそれだけのことでの世界はこんなにも色あせる。彼女が数日来ないだけで世界はこんなにも濁んでも見える。

私はいつものようにお茶を飲んでまつたりとしようと思うが、何故かできない。ただただ私の中にできた空虚を埋めてくれる存在を待ち望んで空を眺めているだけ。

桜華。

彼女と会つたのは彼女の妹であるレミリア・スカーレットが異変を起こしたとき。正確には私がレミリアを倒し、意氣揚々と神社へと帰ろうとした時だった。

「あら？ どうしてここにいるのかしら？」

ぞわりとした感覚が身体中を巡り巡った。私は本能的に前に飛んで後ろを見ると、私がいたところには月の反射で綺麗に光る直径5mはありそうな槍が突き刺さっていた。私は睨めつけるように槍が飛んできたであろう場所へと目を向ける。

そこには

がいた。

私にもこの表現でいいのかわからないけれど、この表現でしか合わないとも感じる。まさに幻想。

月夜に照らされ、煌めく金と青紫のメッシュの髪。まるで夜に愛されているかのようにその姿は清々しいまでに美しかった。

そんな彼女に見惚れていると彼女の緋色の瞳が私を射抜く。まるで全てを見抜くようなその瞳に私は少しの恐怖を抱き後ずさる。

「私の妹が馬鹿をやってしまったみたいね。ごめんなさい。この紅魔館の主である私、S c a r l e t · T h i r e i · 天月からお詫びするわ。さつくだけ……私、紅魔館の主として決着をつけないと困るのだけれど……どう思つたらいい？」

「べ、別にいいんじゃないかしら？」

私はなんだか戦つてはいけないようを感じて戦つことを拒否しようとする。なんだか傷つけてはいけないという概念が押しつけられたような気分になった。

「それもそうね。この子も私が寝ている間にこんなことして……
そんなに暇だったのかしら？まあ、いいわ。この赤い霧はすぐに拡
散してあげる。」

そういうと彼女は私にはわからない言葉で話しだした。だけど、そ
の言葉を話しだしたとたんに私にとつもない威圧感が放出された。

「まあ、こんなものでしょ。ビリ～一応魔力でできていたみたい
だから魔力で反対属性を作り出して消滅させてみたのだけれど…
…なにか空気に不快感を感じたりするかしら？」

「……特にないわ。」

私も魔法などには詳しくはないけれど、即座にこの霧の属性を導き
出して、その反対の属性を作り出す何て並みの魔法使いでもできな
いと思う。それをレミリアの姉だと名乗る彼女は簡単にてしまつ
た。魔理沙も彼女のような人物に師事してもらつたらいいのに等と
思つてしまつるのは仕方がないことだと思つて勘弁してほしい。

「……この異変は終わりを告げた。」

「……にしても、本当になんで来ないのかしら。」

べ、別にさびしことかじやないけれど……じやないんだけど……あ
あ、むしゃくしゃする。

いつそのこと桜華の行つてこるとかいう学び舎に行つてみようかし
ら。どうがなんでいまさら学び舎? いつも通り私のところに来た
らしいのに……せしたら紫とかの馬鹿たちから手つてあげるの。

そういえば、清涼祭……だつたかしら? 紫達が行くとか言つていた
わね。私を無視して桜華に会いに行くなんて……許せない行為だわ。

今度会つたら夢想封印でもくらわしてあげようかしらね。桜華と一
緒に叩き潰すところのもありかしら? 今のうちに考えときまじょう。

……私を置いて行つた罪は大きいわよ?

私と清涼祭と始まり・・・

ついに清涼祭が始まった。結局始まるまで紫達は来なかつたけれど、来たら来たで殴る（従者達が）からまあ良かつたと思つておこひ。

私達Aクラスは文月学園が清涼祭をするに当たつて配るチラシにでかでかと載る。言つならば文月学園の顔なのだ。なので私達はチラシ配りは全くする必要がない。他クラスは直径3cm程度の大きさの写真が載つてるので少し配ればいいが、Fクラスなんて全く載つていいない。つまりFクラスは自分達でチラシを作つて配らなければならぬのだが……我が一年のFクラスは全く配る気配がない。何故ならばこの文月学園ならではの催し物である『試験召喚大会』なるものがあるからだ。おそらくだがコレでFクラスの宣伝をするのだろう。

まあ、それはおいておいてなにがいいたいかといふと……

「いらっしゃいませお嬢様方。此方の席へどびうぎ。」

Aクラス、快調でござります。

開始直前にはもう列ができていたからますます意味がわからない。こういうのは男の人が多いとは思つていたけど意外と女人も多い。

ていうか五分五分な感じ？何故？

あ、そういうえばAクラスのチラシで私と翔子が代表と副代表ということでメイド服で載つていたけど……それが原因？いや、でも「写真だけじゃ無理よね。……女人の説明がつかないわ。なら文を考えた優子と愛子のせい？」

一番可能性があるわね。

「……かなんでさつきから私が案内するのは女人ばかりなの？なんで私の顔を見ると顔を赤くするの？私、なんかしたかしら？」

「……相変わらず副代表の破壊力は抜群ね。」

「あはは……私でもたまにドキッとするもん。あのオーラを初めての人がくらつたらああなるよ。ていうか天月さんに気づかれないようにお密さん『桜華・S・T・天月を愛する会へのお薦めと入会の手続き。』とかいうチラシを配つている十六夜さんも負けず劣らず凄いけどね。」

「お陰様で会員数が東京の人口の三分の一程になりました。」

「にしてんのよつ！？」

「とかかんでそんなに私人気あるのつー？」「なんなんだつたらアイドル目指した方が良かつたんじゃないかしら？」

……なるつかしら……別世界で。ID LM@ST Rの世界とか
良いんじゃないかしら。うん、良いわね。あはははは

「あ、副代表が遠い眼をしだしたわ。」

「本當だ。それでも絵になるのが凄いね。」

「ああ桜華様……流石です」

テメエらいつか殴る。

絶対に。

おっと、怒りのあまり男の頃に戻りつつしてたわ。全く……怖いものね。感情というものは。

因みに私達がやっているのはメイド喫茶。何故か男女両方から凄い勢いで手が上がり、私以外の満場一致で決まった。意味がわからぬ。なんで皆さん私を見て手を上げてたの？ 虐めですか？ 虐めんですね。わかります。

あれ？

眼から汗が……

「あ、副代表が涙を流し出したわ。」

「本當だ。やつぱり絵になるね。」

「お、桜華様……ふつくしい……」

許さない。

絶対になアつ……

おつとまた男に……やれやれね

ただ一つ言わしてくれないかしら？

(・・) クソガツ

ああ、なんだかすつきりした気分よ。良かつたわ、破壊活動に勤しむことにならなそうね。主に人体の解剖なんて興味が出てきてたのに……命拾いしたわね。

私と清涼祭と△クラス・・・（前書き）

どいつも

今日が誕生日な作者です（笑）

誕生日だからにかやりたかったのですが……思いつかなかつたので勘弁です（苦笑）

今回、神隠しの共犯者さんとコラボさせて頂きました。そちらの方も是非見て下さいね

「にしてもやつぱり一年生からの出場者が多いわね。優子と翔子

「そうですね。Eクラスの代表以外の一年生の代表は出場するみたいですから。」

どうやら一年生は今回の清涼祭を楽しむ予定のようだ。まあ、三年生になると進学やら就職やらで色々と忙しくなるから仕方がないといつたら仕方がないのだけれど……

まあ、私には関係ないけれどね。だって私、財産なら結構あるし、幻想郷の物価つて結構安いから私からしたらどうやって今を楽しもうかとか、そつちのほうが大切なことだしね。

「咲夜、そろそろ雄一が来る」さうだから準備だけしておいて
ちょうどいい。」

「かし」しました。奥の部屋を「用意しておもむ。」

「宜しくお願ひするわ。」

それから十分後に雄一が来た。秀吉とムツツリーを連れて。予想からしてこの二人には話したのだろう。まあ、話すと思っていたから特に問題はないけれど……今回のこととは私たちの企みがばれたらおしまいだからね。少し慎重に事を運んでほしいとか思つてしまふのは私の勝手かしらね。

「雄一、よく來たわ。一人には話したのじょうへなら咲夜についていつてちょうだい。そこで話すから。」

「わかつた。十六夜、宜しく頼む。」

「かしこまりました。」

そう言いながらほとんど無言状態で咲夜の後ろについていく雄一、秀吉、ムツツリーの三人。私も愛子に断りを入れてからついていく。ちなみにだが優子と翔子は試験召喚大会の予選で戦っている。まあ、あの二人のことだから速攻でおわるでしょう。この話を聞かれないとためにもさつさと話してしまいましょう。

「さて雄一。本題に入るけど……その前に質問は?」

「当然ある。この情報に関してはお前のことだ……ガセ情報は流さないだろう。だが、こいつらに話して本当に良かったのかどうかにかんしては聞きたいな。」

「そうね。秀吉に関してはその演劇力。今回の作戦には必然的に必要になつてくるわ。後は土屋君ね。彼はおそらくこの学園とその

付近に隠しカメラを仕掛けているはずよ。その彼が持つ情報力は私たちの武器になる。私たちも情報は集められるけど彼ほどすばやく集めることは不可能よ。それに彼も無口であまり表情に表わさないといつといひでも高評価よ。

「……なるほどな。とにかく納得はしておひつ。で? 本題とはなんだ?」「……

「やうね。今回の黒幕……つまり竹原教頭先生のことなんだけれど……おそらくあの小悪党は手段を選ばないわ。Fクラスが邪魔することができるところのうち付近のヤンキー共を使って誘拐でもされるでしょ。それで今回の試験召喚大会の商品であるナニカをゲットするために送り込んだ三年生のAクラス生徒で勝ちにくるでしょう。……いまではいいかしら?」

「ああ。」

「う、ちょっと待つてほしいのじゃつ……」

ここ初めて話す秀吉。あれ? 雄一に簡単に説明するように紙に書いてあげたのにしてないのかしら? 遠まわしに話をする時間は少ないとも云えてあつたんだけれど……。とりあえずジート目で雄一を見つめてみる。

「ジート――――――

「……」

「ジト――――――」

「……口で言ひなよ……」

「うぬれこ「」

なんだか誰が「」だとがほざこしてゐるけど私的にはこの鼻血を出しているメイド長が問題なのよ。相も変わらず変態なのね。ムツツリーも鼻血を出しているし……秀吉は顔を赤らめているし……この学園は変態ばかりね。嘆かわしいわ。……おもに私の癒しの場所があまりないことですね。

「とにかく……秀吉、どうしたのかしら?」

「黒幕がどうとか、誘拐がどうとか……意味がわからないのじゃ。詳しく述べてくれんかの?」

「無理。時間がないわ。それは説明を怠つた雄一に聞いてちょうだい。」

「……わかったのじゃ。」

とにかく話をつづけましょ。もう少ししたら翔子たちがかえてくるはずだから。

それにもしても……「」して作戦を話しているといい刺激になるわね。頭がさえてくるわ。昔に戻つてくるみたいに……。

「（桜華様……………まさか……………）」

なんとか次話完成。

シリアルとか良い言葉は難しい（-〇-；）

清涼祭。つまりは祭り。私に祭りを楽しむ時間ができるなんてね。いつして祭りを楽しんだりどうでもある一つの考えが頭の中を過ぎ去って本心からこの祭りを楽しむことができない。

ダメね。昔から祭りってこののは楽しむものだと聞いていたのにね。やっぱり昔を思い出してしまつかかしら……咲夜達にもどうせやりながらもどうせやりたいみたいだし、気をつけないといけないわね。

「咲夜、愛子。私は一回外すから後はよろしくね。」

今回、私は雄一達との契約を守るために、時々抜ける代わりに休憩の時間はこらなことこう苦渋の選択で抜けることを許されていく。

フランチャニア達には懲りたとことしまじょう。

「秀吉、今のところいかがあれ……」「なんだこのあつたねえ机はよおつ……」
「……絶賛バカ発生中みたいね。」

「…………む。申し訳ないのじやが頼むのじや。」

「わかつたわ。ま、大船に乗つたつもりで見ときなさい」

そういうながら私は暴れでいるハゲとモヒカンのもとへと歩いていく。

その間に「あ、あの子って清涼祭の広告に出てた……」やら「あ、天月様つ！？ なんでここに……」やら「ああ……なんて神々しいのかしら……お仕置きされたいわあ……」やら聞こえてきた。

……やめて…… いのままだとこの街での私の有名度が限りなく増えしていくわね。……咲夜、貴女を奴隸にしてあげるわ。ええ、もちろん貴女にとつて『褒美だ』ということはわかりきつているわ。……わかつてているけど……私にはやるべきことがあるのよ……つ……

「ねえ、貴方達。」

「ああ？」

「なんかようか？」

……どうしてかしら。 いこつらが良い人に見えてきたわ。私のことを知らないからかしらね。あの変態度をいつも間近で見てたから……

「初めまして……になるわね。私の名前は桜華・S・T・天月といの。よろしくね。」

「あ、ああ……」

「よ、よろしくな。」

どひじよひつらー? 本氣でこいつらが良い人に思えるつー? こいつら
……ひちの門番こしよつかしり…… 美鈴の睡眠時間が少ないからね。

「私はFクラスの生徒じゃなくてAクラスの生徒なのだけれど……
……同じAクラスの先輩の貴方達にお願いがあるのよ。聞いてくれる
かしら?」

「まあ……内容によるな。……で?」

私は少し間をとる。

それによつて次第に周りの生徒や客が私に目を向けてくるのが手に
とるかのようにわかる。

「……去ね。」

カリスマ発動つ！

桜華の迫力が大幅に増した。

霸氣発動つ！

桜華の女王様力が大幅に増した。

「ここはFクラス。

私達文月学園の生徒が事情がわからない筈がないでしうつ！貴方達はFクラスの……後輩の楽しみを壊した貴方達は何がしたいの？営業妨害？ただの嫌がらせ？……それとも誰かにやらされてるのかしら？」

「「つ！？」

正解みたいね。

まあ、だいたいこの学園ど営業妨害をするなんてそういうたやからぐらいしかいなからなんとなくわかつてはいたけれど……
実際に……私の後ろからの視線が強まつたしね。正確には窓側の方

だけれど

「まあ……いいわ。因みに、ここはあの西村教諭の担当するクラスなのよ? 不衛生なまま清涼祭で喫茶店をやらせる訳がないわ。まあ、もう一度言つてあげるわ。」

そこで私は冷や汗をかいているハゲとモヒカンに向けて少々殺氣をこもらせて睨みつける。

「去ねつ——ここに貴様等の居場所はないつ——」

そこには半泣きになりながら逃げ惑つ先輩方と悔しがり、桜華を睨

めつけながら出て行く竹原教頭。

そして

大歓声を上げ、桜華を褒め称えるFクラスの生徒と客達がいた。

駄目だわ。

楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい
楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい
楽しい楽しい楽しい楽しいタノシイタノシイタノシイタノシイタノ
シイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイ
タノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイ
シイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイ

……またなの？これは……ユリア？

フラン?

パチュリー？

……そう

やつぱり例え幻想を図つても歯の苦しみをなくすことはできませんね。

私が代わりに苦しみを受け継いであげるだけしか

でも……そろそろ私の中の獣が暴れ回りたいと疼いて止まないみたいね。

あの……すべてを喰い殺した獣が……

……ああ……

誰か

助
け
て

番外、清涼祭。その頃の彼女は（2）（前書き）

今回は番外編

番外は番外だけで集めようかと考えている今日この頃

モコタンのキャラをどうか迷つたけど原作寄りのキャラ。。
二次創作で王道の男勝りキャラは辞めました（笑）

番外、清涼祭。その頃の彼女は（2）

「いやあ、外の世界つてこんなにお技術力が発展してるんだな。」

「そうね。まあ、この焼き鳥より私が焼いた焼き鳥のほうがおいしいけどね。」

「それには同意するぜ。」

金髪に白黒のエプロンドレスを身に纏つた少女と、銀髪でモンペを履いて、髪のところどころに赤いリボンをしている少女といった、コスプレとしか言えないような姿をした二人が文月学園の学園祭、つまり清涼祭を歩き回っていた。

二人は校舎外でやつていた屋台で買つた焼き鳥やたこ焼きといった食べ物を食べ歩きしている。その姿は容姿がいいだけに周りの学生や客たちの視線を集めている。そんな彼女らの名前は『霧雨カリサメ』『魔理沙』と『藤原フジワラモコウ』という。一人とも幻想郷の住人で、大まかに分けると人間と不死者といったカテゴリーに入る二人なのだが、そんなの関係ないと言わんばかりの仲の良さだ。当然ながら一人は桜華の良き友人……一人は良き変態なのだが……いや、変態に良いも悪いもないような気もしないでもないが……まあ、気にしたら負けなのだろ。う。色々と。

「それにしても隙間妖怪の奴どこに行つたんだ？私たちを学園内に放り込んだ途端にどこかに即移動したみたいだし……」

「わあ？ どうでもいいんじやない？ どうせ魔理沙の場合、桜華に会えたらしいんじやないの？」

「んなつー？ なななななにを言つてこるのかさっぱりなんだぜ／＼／＼／＼

「……わかりやすい。」

そう。霧雨 魔理沙は桜華のことが好きなのだ。女子同士なのに。いわゆるレズビアン、百合などと呼ばれる人たちの一種なのだ。魔理沙が変態と呼ばれる由縁はそこにある。彼女は桜華に対しどういった態度で接したらいいのかわからない一端の乙女なのだ。彼女はどうしたかわからないが故に近くの彼女が好きな人物と同じような態度で接してしまったようになり、変態の一角として周りに知られるようになってしまった。魔理沙が参考にしたのは十六夜 咲夜。桜華の間近におり、いつでもどこでも彼女と共に過ごしている彼女を参考にしたのだ。もちろん、咲夜と桜華の間に家族としての絆があることは分かっているが、そこを無視してもあの距離感は魔理沙にとつてとてもうりやましかったのである。

そんな魔理沙が咲夜から受け継いでしまったのはM気質。そんな気質を受け継いでしまった彼女は桜華にいじめられたいと思つてしまふになつてしまつた。無自覚に。

それに引き換へ藤原 妹紅は桜華とは良い友人関係を築いている。その関係は『博麗 レイム』や『八雲 ラン』と同じくらいと彼女自身

も自負している。それほどまでに仲がいいのだ。また、それほどまで友人といふ点でいえば彼女の親友『上白澤カミシラサワ』慧音ケイネもそれと同等といえるだらう。

誤解をしないように言つておくが、彼女は人見知りをするほうだ。桜華と会つて改善しつつはあるが、それでも完全に抜けるはずがなく他人と話すのも魔理沙や慧音、桜華等といった仲がいい人物と一緒にでなければほとんど話さない。

「それで、いつ桜華に会いに行くの？」

「……終りのほうでいんじやないか？ 桜華もこの学び舎の学生なんだろ？ だつたら最後のほうでピークを過ぎたりしてからのほうが桜華にとつてもいいだろ？」

「……そういう頭の使い方を桜華の前でしていたら変態の称号なんでもらわないのに……」

「あ、あれは緊張してパニックになつてているだけだぜつー」

「それでも残念だね。色々と。」

そういうながら妹紅は魔理沙の胸を凝視する。それに気付いた魔理沙は手に持つていたたこ焼きを落とさないようにしながら胸を隠す。魔理沙の顔は赤く染まっている。逆に妹紅のほうはいたずらが成功したかのような表情をしており、それらの様子は第三者から見てもとても楽しそうな雰囲気を醸し出していた。

「ま、今は遊ぼっか。幻想郷に来てからは初めての外だしね。こういった滅多にない機会は大切に使わなきや。」

「そうだな。お、あれなんかいいんじやないか？『合唱部 世紀末メドレー』。」

「……なんだか『汚物は消毒だあつ！』とか叫ぶモヒカンとかが頭に浮かんだんだけど……まあいいか。じゃあ、一回見ていい。」

その後、二人が合唱部の演奏から抜け出したのは言つまでもない。それを隙間から覗いていた紫がクスクスと笑っていたのも言つまでもないことだらう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103s/>

私とAクラスと召喚獣

2011年12月31日16時49分発行